

42377

教科書文庫

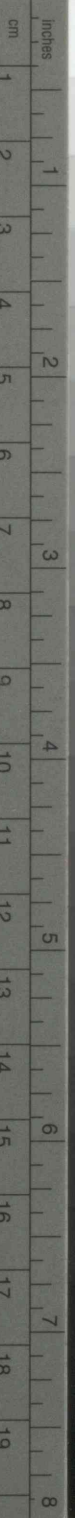
4
8/0
42-1938
200030/ 1504

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

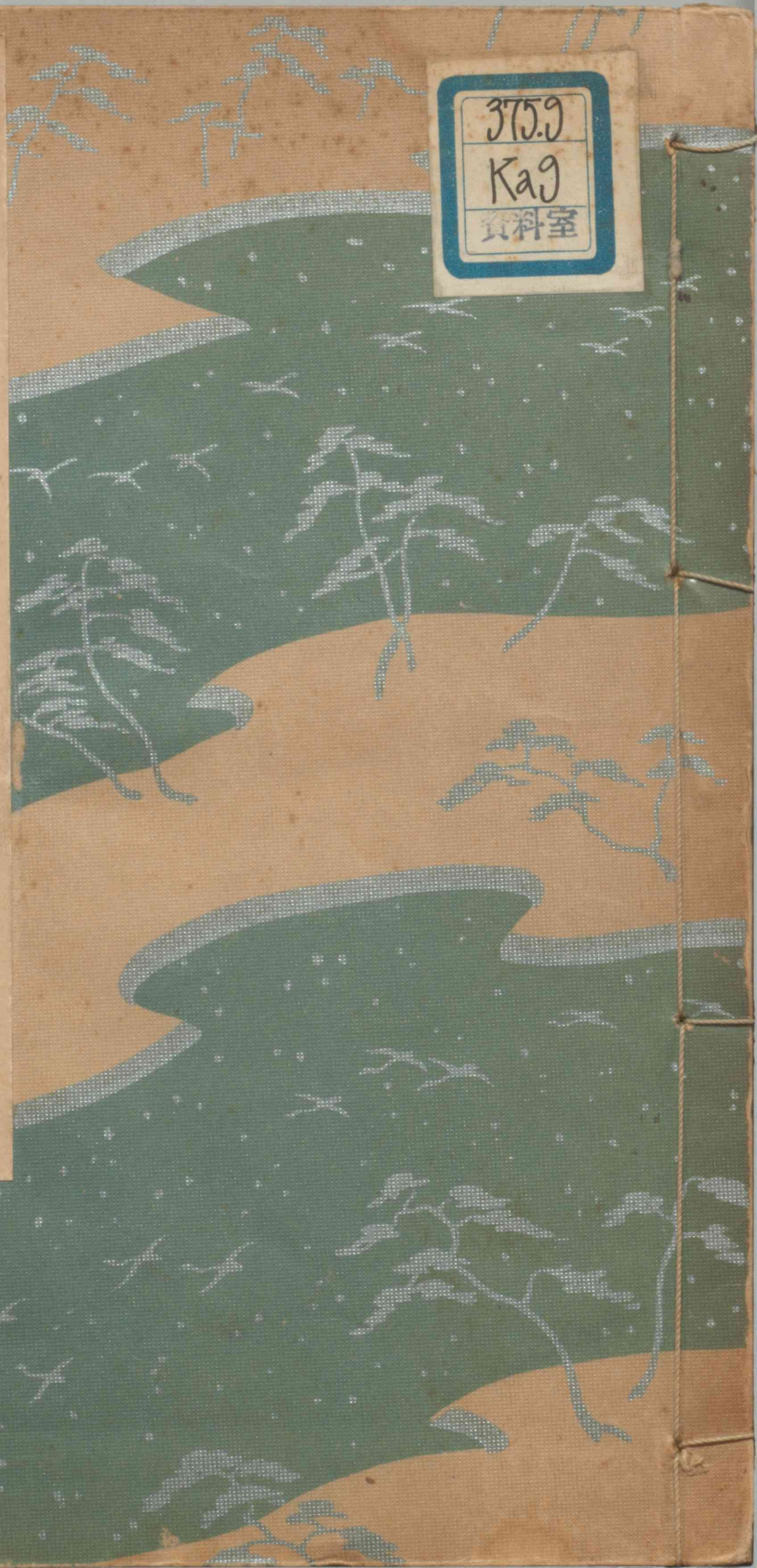
© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ka9
資料室

女子國文新編

四年制 卷一



資料室

375.9
Ka91

文部省檢定

高等女子學校國語教科書 昭和三十三年四月四日

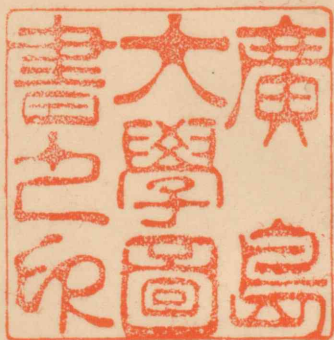
女子國文新編

四年制

東京高等師範學校教授

垣內松三編

女子國文新編



- 一 國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。
- 二 教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。
- 三 縦に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。
- 四 右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

目次 (卷一)

一	言葉	五十嵐 力	四
二	櫻	芳賀 矢一	一〇
三	菜の花	志賀 直哉	一四
四	春の使者	横山 桐郎	一四
五	日の出る前	島崎 藤村	三三
六	維新の大精神	徳富 蘇峯	三六
七	紅 椿	三木 露風	四二
八	永 日	相馬 御風	四四
九	千本松原	伊藤 左千夫	五九
一〇	犬ころ	二葉亭 四迷	六六
二	筍	薄田 泣菫	七九
三	國 境	北原 白秋	八五

三	たんぼぼ	若山 牧水	九〇
四	京城の郊外	安倍 能成	九九
五	蜂の巢	吉村 冬彦	一〇六
六	蜘蛛の絲	芥川 龍之介	一一三
七	湘南雜筆	徳富 蘆花	一二三
八	朝の庭	高濱 虚子	一二六
九	蟻	坂本 四方太	一三〇
一〇	寂しい音	窪田 空穂	一三五
三	蚊	新井 白石	一四四
三	難破船	南條 文雄	一四七
三	知行合一	南條 文雄	一四八
四	修學院の秋	大島 正滿	一六八

附録 國語假名遣一覽

一言葉

五十嵐

力

老農友、H氏の話である。

日本の古言には、簡単な裡に實に奥深い眞理を含んだのがあるものです。

いつぞや——もう二十年にもなりませうか——海上胤平といふ歌人が、小出榮といふ人の歌を評した中に、小出氏の歌に「牛牽き歸る」云々とあつたのを咎めて、外國は知らず、我が國では昔から牛には「追ふ」といひ來つたものであるのに「牛を牽く」といふのは、落着かない詞遣だ、といったのがありました。

當時私はそれを見て、歌人なんて暇つぶしに下らんことを云つて楽しんでゐるものだと思つて、馬鹿にして居りました。

五十嵐 力 文學博士。早稻田大學教授。明治七年生。

*老農友

*古言「眞理」

海上胤平 歌人。大正五年歿、年八十八。

小出 榮 歌人。島根縣の人。明治四十一年歿、年七十八。



が、其の後十數年經つて、はつと思つたことがありましたよ。

それは斯ういふ譯です。

或日牛を一匹板橋まで送つてやる用があつて、一人の男にあづけて出してやりましたが、程なく走つて來て、

「乞食橋の向うまで行くと、牛が坐り込んでどうしても動かなくなりまして。」

といふのです。

「意氣地のない弱蟲だ。それぢやお前が行つて手傳つてやれ。」

と云つて、小力のある他の男をつけてやりましたが、しばらくすると、それが又歸つて來て、「二人でもどうしても立ちません。」

「はつと思つたことがありましたよ。」

板橋 東京市板橋區。

乞食橋 東京市豊島區巢鴨六丁目・西巢鴨二丁目・同三丁目を境せる富士橋のこと。谷端川に架した。

と申しました。

「馬鹿な奴だ、二人掛りで牛一匹動かせない奴があるか。それぢや五平お前行つてやれ。」

と申しますと、五平は

「情ない奴だな、それぢや俺が一つ立たしてやらうか。」

などと云つて、威勢よく出かけて行きましたが、しばらくするとそれも歸つて来て、

「旦那どうしても動きませんよ。今日はどうかしたんですな、打つても、叩いても、引張つても、だまして、一寸も動きませんや。」と申しました。

私は「をかしい事だ。しかし俺が行けばどうにかなるだら

兵部 東京市豊島
區巢鴨六丁目。今
の東京傷兵院。

* 呆然
* 半纏

う。」と怪しみながら、動物に對する飼主の威光と、男どもには多少優つた一日の長とを頼みにして急いで行つて見ますと、成程牛の奴が、兵部邸の裏門の前に大磐石と腰を据ゑて居り、周圍には眞黒に人だかりがしてゐます。それから私は三人の男に手傳はせて、鞭うつたり、あやしたり、いろ／＼工夫をして見ましたが、どうしても一寸も動かすことが出来ません。困りぬいて呆然として居りますと、人だかりの中に、半纏を着て股引をはいた、馬方らしい六十恰好の老爺さんが居りましたが、

「旦那、それぢや動きますまいよ。私が一つやつて見ませうか。」と云つて、呉れました。

「それは有難い、是非に。」

と云つて、ねんごろに頼みますと、老爺さんは私の手から鼻綱を取つて、靜かに牛の右側に立ちました。右の手に持った綱を伸ばして、牛の尻邊を軽く打ちながら、「しつ／＼」と申しますと、大磐石の牛が忽ち一身振ひして、むつくり起きあがりました。それから、老爺さんは後の方に立つて、尻を打ちつゝ、二三度圓く引廻しましたが、やがて三四十間追つて行つて、「さあ、かうして後から追つていらつしやい。もう大丈夫です。」と云つて、綱を渡して呉れました。私は厚く禮を述べて別れましたが、此の時、電光のやうに私

*鼻綱

「牛の尻邊を軽く打ちながら、『しつ／＼』と申します。」

の頭に浮かんで來たのは、例の海上氏の云はれた、牛には「追ふ」と云ふ辭が古言であるといふことでありました。私は一向に古學に不案内ですが、古い大和言葉の中には、いくらかも斯ういふ風に祖先が幾百年の經驗を結晶させて、三四字の中に不動の眞理を疊み込んだのがあることでありませう。言葉の味なんていふものも實にえらいもんですね。私はこの老農夫の話や、賈島が「推敲」の話よりも、應舉が「おのし」の話よりも、觀世大夫が「木賊刈」の話よりも、フロベールが一語説よりも、更に面白く、更に意味が深いと思ひ、黙止すにもだされずして備忘することにした。

「言葉の味」

賈島 唐の詩人。

*推敲 鷹野 圓山氏、通稱主水。有名なる畫家。寛政七年(1825)歿。年六十三。

觀世大夫 觀世派の家元。こゝでは第十二世の重賢か第十三世の重記かを指して居る。祖は結崎三郎清次。

*木賊刈

フロベール

(1821-1880). フランスの小説家。

*黙止す

二 櫻

芳賀 矢一

櫻の咲くのは春である。春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない花曇の日、照りもせず曇りもせぬおぼろ月夜は、雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。そよよと面を吹くや春風。春の特色はどこまでものんびりとした心持にあつて、きりつめたやうなはげしさ、きびしさの少しもないところにある。櫻はちやうどこの時の氣候にはぐくまれて咲出でる花である。實際立つた特色のないのが、即ちその特色である。賀茂眞淵は、

うら／＼とのどけき春のこゝろよりにはひ出で

芳賀矢一 國文學者。

文學博士。昭和二年歿、年六十一。

* 花曇の日

照りもせず 照りも

せず曇りもはてぬ

春の夜のおぼろ月

夜にしくものぞな

き(新古今集、大

江千里の歌)

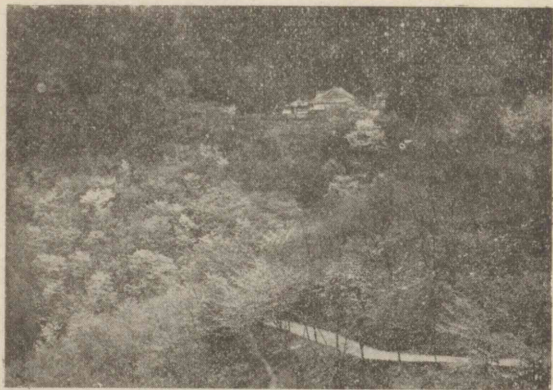
「特色のないのが即ちその特色」

賀茂眞淵 縣居と號

す。明和六年(四三

七歿、年七十三。

たる山櫻花



(堂輪意如は物建) 櫻の山野吉

といった。

春の日は永い。

久方の光のどけき春の
日にしづごころなく花
の散るらん

櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。こゝに大宮人のゆつたりとした優美な様子なども思ひ浮かべられる。

も、しきの大宮人はいとまあれや櫻かざしてけ
ふもくらしつ

* 久方
久方の(古今集、紀友則の歌)

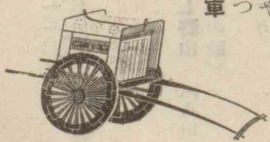
「永陽の日に最もふさはしい花」

も、しきの(新古今集、山部赤人の歌)

* や

* つ

牛車



牛車の歩みおそく、花見て歸るたそがれの景、さながらの繪卷物である。

よし野山かすみの奥は知らねども見ゆるかぎり
はさくらなりけり

これは満山、櫻の雲に包まれた吉野山の風景を詠んだのである。

はなのくも鐘は上

野か淺草か

これは大都會の櫻の

花に蔽はれた光景である。

櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫する花ではなくして、



櫻の會都

* たそがれ
「さながらの繪卷物」

よし野山 (八田知紀の歌)

* けり

吉野山 奈良縣吉野郡吉野町山中の總稱。

「吉野山の風景」

はなのくも (松尾芭蕉の句)

上野 東叡山寛永寺。

東京市下谷區。

淺草 金龍山淺草寺。

東京市淺草區。

「大都會の櫻の花に蔽はれた光景」

「樹として賞翫する花」

樹として賞翫する花である。否、多くの樹を集めて、人はたゞ花の中にもて賞翫する花である。下に見て賞翫する花ではなくして、上にながめて賞翫する花である。春風四月、日本人はすべて花の中の人となるのである。和歌には

もろこしの人に見せばやみよしののよしのの山

の山櫻花

敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山櫻花

いさぎよき大和心を心にてよそには咲かね花櫻

かな

其の外いくらもあらう。櫻は大和民族の象徴と認められ、尊王愛國の象徴となつたのである。 (月雪花)

三菜の花

志賀直哉

志賀直哉 文學者。
明治十六年生。

ある晴れた静かな春の日の午後でした。一人の小娘が山で枯枝を拾つて居ました。やがて夕日が新緑の薄い木の間を透かして、赤々と見られるころになると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持出して、そこで自分の背負つて來たあらい目籠に詰めはじめました。ふと小娘は誰かに自分が呼ばれたやうな氣がしました。

「え、」

小娘は思はずさういつて、起つて其のあたりを見廻しましたが、そこには誰の姿も見えませんでした。

「私を呼ぶのはだあれ。」

「私を呼ぶのはだあれ。」

小娘はもう一度大きい聲でかういつてみましたが、やはり答へる者はありませんでした。小娘は二三度そんな氣がして、初めて氣がつくと、それは雑草の中から只一本、僅かに首を出して居た小さい菜の花でした。小娘は頭に被つて居た手拭で顔の汗を拭きながら、

「小さい菜の花でした。」

「お前、こんな處でよく寂しくないのね。」と、山道で待つと、いひました。

「寂しいわ。」

と、菜の花は親しげに答へました。

「そんならなぜ來たのさ。」

小娘は叱りでもするやうな調子でいひました。すると菜の花は、

「雲雀の胸毛に着いて来た種がこゝでこぼれたのよ。困るわ。」
と、悲しげに答へました。そして、

「どうか仲間の多い麓の村へ連れて行つて下さい。」

と頼みました。小娘はかはいさうに思ひました。小娘は菜の花の願をかなへてやらうと考へました。そして靜かにそれを根から抜いてやりました。それを手に持つて、山路を村の方へと下つて行きました。

路に添うて清い小さな流が、水音をたてて流れて居ました。暫くすると、

「あなたの手は随分はてるのね。」

と、菜の花はいひました。

「小娘は菜の花の願をかなへてやらうと考へました」
「それを手に持つて」

「あついで手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ。眞直ぐにして居られなくなるわ。」

といつて、うなだれた首を小娘の步調に合はせて、力なく振つて居ました。小娘は一寸當惑しました。併し小娘には圖らずいゝ考が浮かびました。小娘は身軽く路端に蹲んで、黙つて菜の花の根を川の流へ浸してやりました。

「まあ。」

菜の花は生返つたやうな元氣な聲をして、小娘を見上げました。すると、小娘は宣告するやうに、

「此の儘流れて行くのよ。」

といひました。菜の花は不安さうに首を振りました。そして、

「うなだれた首を小娘の步調に合はせて、力なく振つて居ました」

*當惑

「小娘を見上げました」

*宣告

「先に流れてしまふと恐いわ。」
と、いひました。

「心配しなくてもいゝのよ。」

さういひながら、小娘は流の上へ持つて居た菜の花を放してしまひました。菜の花は、

「恐いわ〜。」

と、流の水にさらはれながら、見る／＼小娘から遠くなるのを恐しさうに叫びましたが、小娘は黙つて兩手を後へ廻し、背で跳る目籠をおさへながら駈けて來ます。菜の花は安心しました。そして、さもうれしさに水面から小娘を見上げて、何かと話しかけるのでした。

間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花

「黙つて兩手を後へ廻し、背で跳る目籠をおさへ。」

「菜の花は流に打

は流に波打つて居る水草に根をからまれて、さも苦しげに首を振つて居ました。

「まあ、少しさうしてお休み。」

といつて、傍の石に腰を下しました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、氣持が悪いわ。」

さういひながら菜の花は尙しきりにいや／＼をして居ました。

「しきりにいや／＼をして居ました。」

「それでいゝのよ。」

小娘はいひました。

「いやなの。休むのはいゝけれども、かうして居るのは氣持が悪いの。どうか一寸あげて下さい。どうぞ。」

と、菜の花はしきりに頼みましたが、小娘は、

「しきりに頼みましたが。」

「つて居る水草に根をからまれて。」

「いゝのよ。」

と、笑つて取合ひません。が、そのうち水の勢で、菜の花の根は自然に水草からすり抜けて行きました。そして不意に、

「流れるう。」

と大きな聲をして、菜の花は又流されて行きました。小娘も急いで立上ると、それを追つて駈出しました。少し來た處で、

「やつぱりあなたが苦しいわ。」

と、菜の花はこはく、いひました。

「何でもないのよ。」

と、小娘も優しく答へて、そして、菜の花に氣を揉ませまいと、わざと菜の花より二三間先を駈けて行くことにしました。麓の村が見えて來ました。小娘は、

「流れるう」

「こはくいひました」

「もうすぐよ。」

と、聲をかけました。

「さう。」

と、後で菜の花が答へました。

暫く話は絶えました。たゞ流の音に混つて、ばたく、ばたばたと、小娘の草履で走る足音が聞えて居ました。

小娘の足元でちやばーんといふ水音がしました。菜の花は死にさうな悲鳴をあげました。小娘は驚いて立止りました。見ると菜の花は、花も葉も色が褪めたやうになつて、

「早く〜。」

と、延びあがつて居ます。小娘は急いで引上げてやりました。「どうしたのよ。」

「暫く話は絶えました」

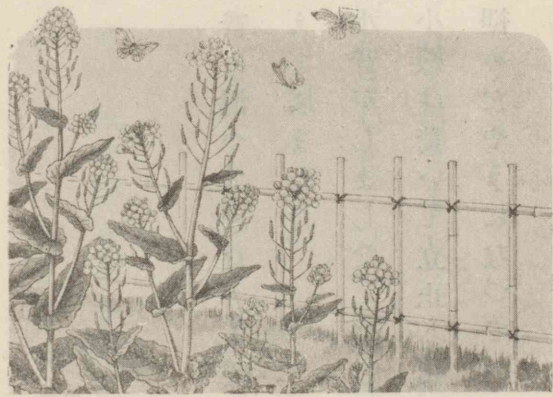
「花も葉も色が褪めたやうになつて」

小娘はその胸に菜の花を抱くやうにして、後の流を見廻しました。

「あなたの足元から、何か飛込んだの。」

と、菜の花は動悸がするので、言葉を切りました。

「いぼ蛙なのよ、一度もぐつて、不意に私の顔の前に浮上つたのよ。口の尖つた意地のわるさうな、あの河童のやうな顔に、もう少しで私の頬ぺたをぶつつける所でしたわ。」



庭の菜の花

「飛込んだの」

* 動悸

と、いひました。小娘は大きな聲をして笑ひました。

「笑ひ事ぢやあないわ。」

と、菜の花はうらめしさうにいひました。

「でも私が思はず大きな聲を出したら、今度は蛙の方でびつくりして、あわててもぐつてしまひましたわ。」

かういつて、菜の花も笑ひました。

間もなく麓の村へ着きました。小娘は早速自分の家の菜畑に、一緒にそれを植ゑてやりました。そこは山の雑草の中とは違つて、土がよく肥えて居りました。菜の花はどんく〜延びました。そして、今は大勢の仲間と、仲よく仕合はせに暮せる身となりました。

(荒絹)

「仕合はせに暮せる身となりました」

四 春の使者

横山 桐郎

空には麗かな日光が射し、野には枯草の間を縫つて流れる小川の水が温み、鳥の聲にも春の讚美が聞かれる三月も終り頃になると、「待つてみました」とばかり、流の上をくるくくるくる、いとも軽やかに走り回つてゐる六・七ミリメートルの小蟲がある。かういつてもまだ氣づかない人も、春から夏を通し、秋へかけて、池や河の水の面を、さも面白さうにくるく回りをしてゐる、小豆粒程な黒光りの小蟲といへば、まづ大抵合點がゆくであらう。彼の名は「みづすまし」、一名「まひまひむし」といふが、漢字では「蚊蟲」又は「寫字蟲」と書く。寫字蟲といふのは、この蟲の運動の仕方がちやうど水面に字でも書いてゐるやうに見える處から來てゐるのであらう。「まひまひむし」もやはり其の運動狀態から來た名に違ひない。

實際その名の示してゐるとほり、この小蟲は蟲界まれに見る水上滑走の名手である。水上を巧みに滑つて歩く蟲はいろいろある。「かはぐも」「あめんぼう」の類、めだかは「ねかくし」の類、ある「はへ」の類、みづぐも「みづすまし」の類、澤山ある。しかしそれらのうち、どの蟲もこの「みづすまし」の妙技には到底及ばない。「あめんぼう」などはかなり巧みな方ではあるが、その運動は直線的で「つゝ」してゐる。ところが「みづすまし」のそれになると、曲線的で優雅の趣に富んでゐる。これを人間のやるスケートディングに比べるなら、「あめんぼう」のは單なる「スピードスケートディング」に過ぎないが、「みづすまし」の

横山桐郎 農學博士、昭和七年歿、年三十九。

*春の讚美

「待つてみました」とばかり」

*さも

みづすまし 昆蟲類中鞘翅目蚊蟲科に屬す。



「蟲界まれに見る水上滑走の名手」

かはぐも 有吻目陸棲類水黽科。

みづぐも 有吻類に屬する昆蟲。

「曲線的で優雅の趣に富んでゐる。」

スピードスケートディング 直線滑り。

なると、一步進んで「フィギュアスケートイング」にたとへることが出来る。しかもその伎倆に至つては、人間の選手を抜くこと遙かに遠く、天晴れ、水上の名滑走者たる名を奉つてもいゝ。處で彼は如何してかゝる妙技を演ずるのであるかといふと、彼が滑走に使ふ道具は六本の脚である。而も、そのうち後方の四本は短くかつ扁平で、水をかいて敏速に體を前進させるのが其の重な役目であるが、前方の一対だけは非常に發達してゐて、體の方向を轉じる舵の役目をすると同時に、又食物を捕へるのにも便利なやうに出來てゐる。彼が滑走に使ふ道具はこれだけであるが、又その體が非常に滑かで、水面との摩擦を防ぐのに適してゐることも、其の妙技をして、いやが上にも巧みならしめてゐる事は見逃してはならない。

フィギュアスケート
イング
型滑り。
*天晴れ
*奉つてもいゝ
「滑走に使ふ道具」

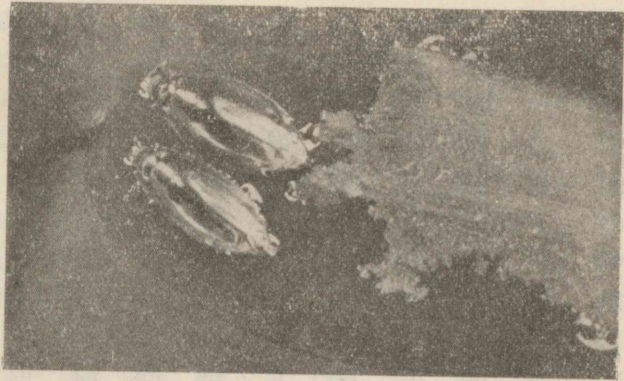
「みづすまし」は一寸見ると、いつも絶えず水面を滑走して居るやうに思はれるが、彼もまた生物である以上、時に休息もする。さういふ場合に、彼は水面にじつと靜止してゐることもあるが、又水から出て棒杭や水草の莖にはひ上つて休んでゐることも多い。しかし、もし人が近づいたりすると、彼は忽ち滑走を始める。そしてその驚が激しい時には、水中に潜り込んでゆき、水底に横たはつてゐる棒切の下とか、水草の根際とかの間、身を隠してしまふ。やがて時間がたつて危険が去つた頃、再びついと水面に浮かび出て來て、欣然と旋回してゐる。

「もし人が近づいたりすると、彼は忽ち滑走を始める」

*欣然
*旋回

この水面の愛敬者は、普通は水面に浮かんでゐるが、場合によると水から出ることも出來れば、又水中へ潜入することも

出来る。又時には、水から飛出して空中を飛翔する事さへ自由なのである。即ち、彼は水陸空の三界を、自由にかけ回ることが出来る果報者である。彼は腹部の背面に呼吸器を持つてゐて、これを覆うてゐる羽根の下に空気を貯へて置き、それから酸素をとることによつて、水中でも呼吸を続け生命を保つてゐる。しかし、その場合酸素の量には限りがあるから、いつまでも水中に居ることは出来ない。數分間の後には又水面に出て來て空気を新たにする必要がある。



* 飛翔

* 三界

* 果報者

又空中を飛翔するのは主に夜間で、晝間太陽が輝いてゐる時には飛ばない。夕方までは全く死の水溜であつたのに、翌朝見ると可愛らしい「みづすまし」が、さも愉快さうに踊つてゐるのを見ることがあるが、さうした現象は彼等の夜歩きを物語るものである。

しかもかうした性質はたゞ「みづすまし」に限らず、水棲昆蟲類の大部を通じて持つてゐるもので、神社の天水桶の中に「げんごらう」が泳いでゐたり、雨上りの水溜に「あめんぼう」が遊んでゐたりするのは、皆これらの水蟲には、水陸空の三界に生活し得る機能が與へられてゐるからである。さう思ふ時、萬物の長なりと自ら誇つてゐる人間などは、生活範圍の局限せられてゐる不自由極まる生物であることを痛感せざるを得

「夕方までは全く死の水溜であつた」

「水棲昆蟲類の大部分を通じて持つてゐるもの」

「げんごらう」 鞘翅類五節亞目に屬する一種。

* 機能

* 生活範圍の局限

ない。總じて昆蟲といふものは、元來陸棲を原則としてゐたものが漸次に水棲に移つて行つたものであるから、全然水棲になりきららないで、昔の陸棲時代の習性がいまだに残つてゐるものと見なされてゐる。それ故彼等水棲昆蟲共は、全然水中ばかりに、若しくは全然陸上又は空中ばかりに生活するといふ事は難かしいので、水と陸若しくは空中とを半々に生活してゐる。そしてある者は幼蟲時代だけを水中に送り、親になると陸上若しくは空中生活に移る。「とんぼ」や「かげろふ」は其の例である。

ところで「みづすまし」は、親になると水陸兩棲生活をやるこゝとが出来ることが出来ない。そして體の兩側にある鰓で呼吸上へ上ることが出来ない。

*原則

*習性

かげろふ 蜻蛉。昆蟲類中野蠲目。とんぼに似た小蟲。夏秋の頃出るが極めて短命。

「幼蟲」

をしてゐることは魚同様である。この蟲は、親子共に水棲の小動物を食して生活してゐる。そして面白いことには、親蟲の眼は上下に分れてゐる。それは、上方の眼は水面を、下方の眼は水中を見る役をなすものと解釋されてゐる。

秋十月十一月頃になると、彼等は皆水底の泥の中に潜り込んで冬越しの準備に入る。そして、一冬を全く眠つて送るが、再び春が訪づれば、春光が野にあまねく行き擴がると、いつの間にかその隠家を出てひよつこり水面に現れ、銀の小粒のやうな體を惜しげもなく回轉させて、春の來た事を吾々に告げてくれる。私は春まだ淺き日、この蟲の姿を見る毎に、「お、春の使者よ、もう御前は來たのか。」と思はず獨言するのである。

「銀の小粒のやうな體を惜しげもなく回轉させて」

「お、春の使者よ」

(優曇華)

三日の出る前

島崎藤村

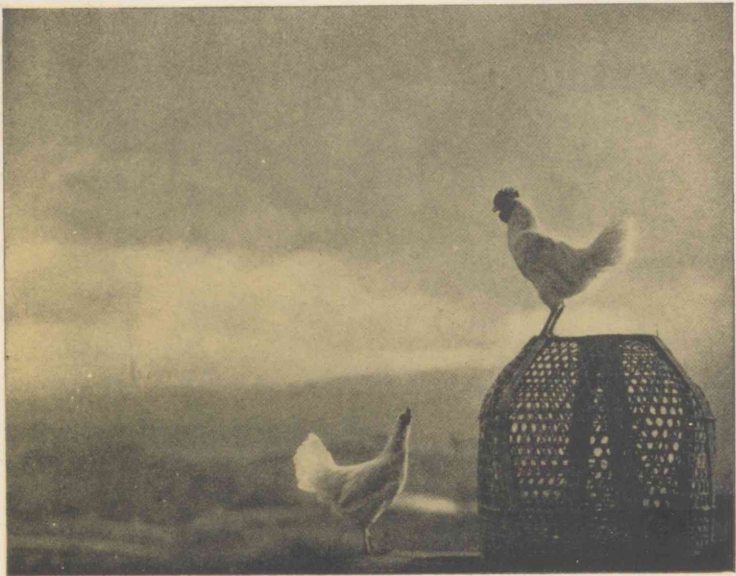
鳥の世界は暗くて、いつまでも夜が明けませんでした。鷹だの、鴉だの七面鳥だの、鷺だの、それから鶏だのいろ／＼な鳥が首を長くして、もう夜が明けさうなものだと言つて居ました。鶯や雀や鴛鴦まで皆と一緒に居て、おてんたうさまの出るのを待ちました。

どうしたのか、いつまで待つても同じなものですから、鷹は待ちくたびれ、鴉は欠伸をし、雀はぶつ／＼言ひ、七面鳥でも鶏でも日の光に渴ゑてしまひました。鳥の中でも鶯は好い聲で夜の歌を歌つて居ました。氣の短い七面鳥などは待遠しがつて、

島崎藤村 名は春樹。文學者。明治五年生。

「もう夜が明けさうなものだ」

*渴ゑ
「鶯」
「七面鳥」



暁

鶯はのんきだなあ。いつまであんな夜の歌など歌つて居る氣だらう。」

と言ひました。

「たれだ。この夜の長いのに、まだこれでも短いやうなことを言つて居るのは。」

と、怒つて居るのは鴉でした。

「鳥の世界には夜は明けないのかも知れない。」

と、鷹が言出しました。

「とても私は鷹のやうな氣長なことを言つて、おてんたうさまの出るのを待つて居られない。」

と、七面鳥は言ひました。

鳥仲間には、黙つてみんなの言ふことを聞いて居るやうな

鷺も居ました。鷺は氣の短い七面鳥や、物をほじくりたがる鴉のおしやべりを煩さがつて、獨りで遠い先の方のことを夢に見て居ました。そんな遠い先の方の日の出の夢を見て居ました。

「どうです、皆さん。」

と、その時言出したのは鴉でした。

「一體おてんたうさまは東の方から出ると定つたものでせうか。」

「鴉がまた何かほじくり出した。」
と言つて、鷹は笑ひました。

「いや、うつかりすると、おてんたうさまは西の空からも、南の空からも出ますぜ。」

と、鴉が言ひました。

「大きに、さうだ。私達は東の方ばかり待つて居た。どんなすばらしいおてんたうさまが思ひもよらない方から出て、西の空から夜が明けないとも限らない。」

と言ふのは七面鳥でした。

いつまで待つても夜が明けないものですから、鳥仲間はおてんたうさまの出る方角にさへ迷ひました。そしてがやがや言騒ぐうちに、しまひには皆くたびれてしまひました。中でも氣の短い七面鳥や、おしやべりの好きな鴉などは、もう夜明けを待つ元氣もないほどに、がっかりしてしまひました。
「私達は一生おてんたうさまも見ずに死ぬのだ。」
七面鳥はこんなことを言つて鳥仲間を笑はせました。

「鷺」

「おてんたうさまの出る方角にさへ迷ひました」

「がっかりしてしまひました」

そのうちに鶏は他の鳥の知らないやうな力をつかみました。鶏は眼をさましたのです。そして夜明けの近いことを知つたのです。第一に身を起しました。それから鴉の言つたことなどに迷はされずに、確におてんたうさまの出るのは東の方だと思ひまして、ありたけの聲を出して勇ましく鳴きました。

途方もない鶏の叫び聲に、驚いたのは鳥仲間でした。日頃、遠見のきくのを自慢にして居た鷹の眼にすら、そんなおてんたうさまらしいものは見えもしません。



夜明け

「鶏は眼をさましたのだよ」

「ありたけの聲を出して勇ましく鳴きました」

「途方もない鶏の叫び聲に、驚いたのは鳥仲間でした」

「鶏に一ばい食はされた」と言ふのは鴉でした。

「あの鶏はおほかた寝ぼけたのだらう。」

と言ふのは七面鳥でした。そのくせ、鴉でも七面鳥でも夜明けを待ちくたびれて、うとくと半分夢を見て居たのです。

まだ空は暗かつたのですが、しかし鶏は一度鳴いた自分の聲に勵まされました。二度目の時をつげる頃には、その鳴聲が深い霧の中に響き渡りました。その時になつて鶏は、鳴けば鳴くほど自分に力の出て来るのを知りました。

いつになつたら夜が明けるかと思ふやうな鳥の世界にも朝が来て、あのあか／＼としたおてんたうさまが美しい顔をお出しになるのも、もうそんなに遠いことではなからうと思ひました。

(をさなものがたり)

*一ばい食はされた

「鶏は鳴けば鳴くほど自分に力の出て来るのを知りました」

「もうそんなに遠いことではなからうと思ひました」

六 維新の大精神

徳富蘇峯

徳富蘇峯 名は猪一郎。貴族院議員。文久三年生。

五箇條の御誓文は、實にこれ維新大改革の宣言書である。日本帝國の新時代に於ける第一聲である。過去に於ける三千年の歴史を一括し、將來に於ける幾千載の國是を指定したる帝國不磨の寶典である。實に時代の一大志望、舉國の一大渴仰を、明治天皇の御名もて、神明に誓はせ給ひ、天下に示し給うたものである。

「時代の一大志望、舉國の一大渴仰」

抑、五箇條の御誓文は、維新の詔書と同時に成つたもので、實に明治元年三月十四日、天皇紫宸殿に御し、群臣を率ゐて祖宗の神靈に誓ひ、之を中外に宣し給うたものである。

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

紫宸殿 京都御所の正殿。朝廷の儀式を行はせ給ふ所。
* 萬機

これが明治二十二年、帝國憲法によつて、帝國議會を開設し給うた根元である。而して此の會議を起し、衆に諮るは、我が上代歴史に示す如く、祖宗以來の慣行である。

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

* 經綸
* 進歩

これは舉國一致、以て國運を進捗せしめ、帝國の世界に對する天職を遂行することを意味したものである。

一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス

此の一條中の主眼は、其志を遂げの點にある。其の志を遂ぐることは、國民の志望を遺憾なく發揮せしむることを意味する。それたゞ其の志望を發揮し、日に就り、月に將む。故に自ら倦むところを知らず。

* 倦む

一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

これが維新大改革の中樞點である。長き歴史ある國民は、動もすれば、其の歴史に拘り囚れて、其の歴史の最も不必要の部分、最も有害の部分、即ち過去の糟粕とか、塵垢とか云ふ部分に執着するものである。故に建國の大精神に顧みて之を一洗する必要を生ずる。如何なる家に於ても、一年に一回、乃至兩回の大掃除は必須である。況や國に於てをや。復況や其の國數百年鎖國の狀態に停滯したるに於てをや。茲に天地の公道と特書せられたるは、單に一國一州の舊例故慣を株守せず、進んで世界共通、人類總體の奉じて以て公道と爲す所を、正視濶歩すべきを示し給うたもの。

一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

- * 陋習
- * 中樞點
- * 糟粕
- * 執着
- 「建國の大精神」

- * 舊例故慣
- * 株守
- * 正視濶歩

讀んで字の如し。殊更吾人の説明を要しない。

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ
天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立
ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

如何にもあり難き思召である。此の五箇條の御誓文は、實に帝國の向ふ所、國民の趣く所を指點したる羅針盤であり、燈明臺であり、案内標である。吾人が維新の大精神に立返れと云ふのは、とりも直さず此の五箇條の御誓文に立返れと云ふのである。

(國民小訓)

- * 未曾有
- * 國是
- * 保全の道
- * 協心

- * 羅針盤
- 「維新の大精神に立返れ」

七 紅 椿

三 木 露 風

三木露風 名は操。詩人。明治二十二年生。

山越えて來たふるさとの、

家の籬にたゞ一つ、

紅い椿が咲いてゐる。

ありし昔をそのまゝに、

夢ともならで咲く花よ、

昔きのふ吹いた西風は、

入身遠い響となつて消え、

中けふ麗かな海の町、

あゝ西風の止んだやう、

我が悲しみも過去つて、

ひとりしみる海を見る。

ふるさとの、ふるさとの、

家の籬の紅椿、

その葉を越して

海を見る。

海を見る。

(青き樹かげ)

「籬にたゞ一つ」

「昔をそのまゝに」

「海の町」

「海を見る」

「紅椿」

「海」

八 永 日

相馬 御風

良寛さまは地藏堂に参詣して暫くそこに足を休めてから、更に又托鉢をつゞけるつもりでしたが、行つて見ると、そこには女の子どもたちが集つてゐて、堂の前の手洗石の周囲を取巻いて、一心にその水を覗き込みながら、聲をそろへて唄をうたつてゐました。子ども達は手にくゝ花のついた蒲公英の長い莖を五六本ばかりづつ持つてゐました。

「おもしろい唄ぢやなあ。」かう思ひながら、良寛さまはそつと子どもたちの後に立つて、覗き込んで見ました。手洗水の中には、蒲公英の莖を花の付根のところまで細く裂いたのが入れてありました。

相馬御風 名は昌治、文學者。明治十六年生。
良寛 禪僧。歌人、又書をよくす。天保二年(西元)寂、年七十五。
* 托鉢

「おもしろい唄ぢやなあ」
「エゴシヤ(蒲公英の方言)の唄」
エゴシヤ エゴシヤ
なぜ髪ゆはぬ
櫛がないかや
鏡

子どもたちがそれを水の中に入れると、細く裂かれた莖の裂片が一筋々々くるくゝと巻縮んで、花を中心に髪を結うたやうな形になるのです。子どもたちはそれが面白いと見えて、代るくゝに自分の持つた蒲公英の莖を裂いては水の中に入れてました。そして皆聲を揃へて唄をうたひながら、その巻縮むのを嘯し立てるのでした。

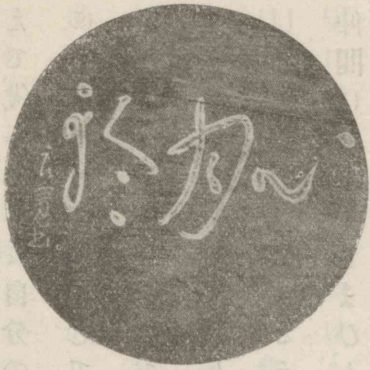
それは良寛さまにとりても、ひどく面白いことでした。そしてそれを見てゐるうちに、良寛さまも亦いつとなしにその仲間になつてしまひ、しまひにはその唄までおぼえて、我知らず大きな聲で子どもたちと一緒にうたひ出しました。

良寛さまのその聲に、今まで夢中になつて少しも氣づかずにゐた子どもたちは、驚いて一せいに振向ききました。

櫛や鏡は 澤山あれど
とくさん 死なれど
三吉や 江戸へ何を樂しみ 髪ゆはうぞ。」

* とりても
「我知らず大きな聲で子どもたちと一緒にうたひ出しました」

「おや、良寛さまだ。」
「ほんに、良寛さまだ。」
「良寛さま！」



心月輪
良寛が蓋に書いた品

かう口々に叫んで、子どもたちは忽ち良寛さまを四方から取圍みました。
良寛さまは嬉しさうな笑顔を
して、子どもたちの顔を一つ一つ見ました。子どもたちの方では、もうゴゴジャ遊びに飽いてゐたので、それを機會に口々にさまざまな提案をしました。

「良寛さま、一しよにハジキしよう。」

*提案

「一つ一つ見ました。」

「わたしハジキいやだ、でんまりつかう。」

「でんまりやハジキおもしろくない。のう、良寛さま、隠れ鬼しようで。」

*おもしろう

しかし良寛さまは答へました。
「ハジキも面白いな。でんまりもつきたいな。隠れ鬼もしたいな。けれども、わじに一つそのゴゴジャをさせてくれんかの。誰かわしに、ゴゴジャを一本くれるよい子はないかな。」
それを聞くと、子どもたちは皆一せいに叫びました。

「子どもたちは皆一せいに叫びました。」

「わたしが上げるわ。」

「良寛さま、わたしのがよいから、わたしのでしなされ。」
「いや、わたしの、もつとよい。良寛さま、これをあげるで。」

そして子どもたちは先を争うて、持つてゐただけの蒲公英の莖を、のこらず良寛さまの前に差出しました。

「さうかの、それぢやわしが皆貰つとくことにしよう。」

かう嬉しさうにいつて、良寛さまは皆の子どもたちの蒲公英を、残らず貰ひうけました。

持ちきれないほどの大きな蒲公英の束が、良寛さまの手に握られました。良寛さまはその中から一本だけ抜取り、残りを大切さうに懐ふところに入れてから、その一本の莖を指先で裂きました。そしてそれを水の中へ入れました。

それを見て子どもたちは、又聲をそろへて囃し立てました。水の中へ入れられた蒲公英の莖の裂片は、見る間にチリチリと縮れて巻きはじめました。

*よう

「大切さうに懐に入れる」

「おや、ゴゴジャさ、髪ゆうてござるぞ。こりやどうぢや。」

良寛さまは夢中になつて興じました。そして我知らず、子どもたちと一しよに「ゴゴジャ〜」をうたひました。

良寛さまは真先に、綿のやうに疲れた老體を堂の縁に投出して、なが〜と寝ころびました。

それを見ると、子どもたちもつぎ〜に縁の上へ上つて、良寛さまの周圍にねころびました。

かうして一人の老僧と五人の少女とが、しばらく苦しいやうな快いやうな沈黙をつゞけてゐました。

しかし、子どもたちは、さうたいして長い時間も要せず、疲れがなほつて、再び遊び心に動かされ始めました。そしてつ

*さ

「なが〜と寝ころびました」

「苦しいやうな、快いやうな沈黙」

ぎつぎに起出して来て、誰から始めるともなく、良寛さまに話しかけるのでした。

いつとなしに、うとくと眠氣にさへ襲はれてゐた良寛さまも、無暗といろ／＼のことを話しかける子どもたちに引かされて、ぼつ／＼埒もない言葉を取交し始めました。しかし、もう何としても、再び起上つて子どもたちと一緒に遊ぶだけの元氣はありませんでした。さうかといつて、このまゝ子どもたちに逃げられてしまふのも、何となく淋しく感じられました。どうかして此の永い春の一日を折角親しんだ此の子どもたちと共に暮りたい――さうした氣持が頻りと良寛さまの心を動かすのでした。

そこで良寛さまは、億劫ながらも、つい一つの昔噺を話し出

*埒もない

「何となく淋しく」

「子供たちと共に暮りたい」

*億劫

しました。

「ずっと／＼ずっとの大昔のことぢや。あのお釋迦さまといふえらいお方のお生まれあそばした天竺といふ國のな。その國のある山奥の林の中にな。猿と兎と狐と――さうした三疋の、たぐひの違つた獸と一緒に棲んでをつた。しかもその三疋のけだものは、一疋々々違つたけだものではあつたがな。それでゐて兄弟よりも仲善う暮してをつたのぢや。すると、其の噂がいつの間にか國中に廣がつたといふのだ。『お前聞いたか。何でもあの山奥の林の中に、猿と兎と狐が兄弟よりも仲善うして一緒に棲んでをるといふことぢや。同じ人間同志でさへ喧嘩ばかりしてをる世の中に、それは又何と感心なことぢやないか。』」

*天竺

次から次へと、さういふやうな話がひろまつて行つたのぢや。さうしてな。それが又いつの間にか、天においでになる神様のお耳にまではひつたのぢや。

神様はそれをお聞きになつて、

『それは感心なことぢや。それを一つためしてやらう。』

そこで神様は、天から地へと下りておいでになつた。けれども、神様のお姿ではすぐに知れるといふのでな。年よりな乞食の姿になられて、その林のところまで行きなさつた。さうして腹が減つて今にも死にさうな様子をなされてな。その林の出口の石に腰かけておいでなされたのぢや。すると、間もなく、そこへ猿と兎と狐とが一緒に仲善う林から出て來た。乞食の姿をなされた神様はそれを御覽なされ

「神様のお耳にまではひつたのぢや」

*なられ

*なされ

「石に腰かけておいでなされたのぢや」

て、その三疋のけだものに向つておつしやられるには、

『どうか此のかはいさうな乞食を助けてください。わしは幾日も、何も食べないので、今にも死にさうに苦しい。噂に聞けば、お前さまたちは人間にもまさつて情の深い、深切なけだものたちだといふことぢや。どうか此のあはれな私をも救つてください。』

これを聞くと、三疋のけだものは早速『それは氣の毒なことだ』とばかりに、猿は林へ行つて木の實を澤山集めて來て、その氣の毒な年よりな乞食に食べさせた。狐は又川原へ行つて魚を澤山とつて來て食べさせた。乞食は『おかげで命が助かりました』といつて喜んだのぢや。ところが、狐と猿とがそのやうに深切にしてくれてゐるの

に、兎だけは、先刻からたゞもう、あちこちうろついてをるだけで、何一つしてくれぬ。そこで乞食の姿をなされた神様は兎に向つておつしやられた。

『兎さん、お前さまも、猿さんや狐さんと同じやうに情深いと聞いてゐました。どうかお前さまも、猿さんや狐さんと同じやうに、此の憐れな私に何か恵んで下されぬか、頼みます。』
兎がいふには、

『はい、わたしだとして同じやうにお前さまが氣の毒でなりませぬ。けれども、わたしには猿のやうな働も出来なければ、狐のやうな智慧もありません。私はこの通り何も出来ん馬鹿な役立たずの者で御座ります。しかしお前さまがそれほどまでにいはつしやるなら……』

「たゞもう、あちこちうろついてをる」

かういつて、兎はしばらく何か考へ込んで居つたが、急に何か考へついた事があると見えてな。きつとなつて、猿に向つていつたのぢや。

「きつとなつて」

『猿よ、どうか林から木の枯枝をたんと採つて来て、こゝに山のやうに積上げてくれ。』

そこで猿は早速林へ行つて木の枯枝を澤山拾つて来て、兎のいつた通り、そこに山のやうに積重ねたのぢや。それを見て兎は、今度は狐に向つて言ふことには、

『狐よ、どうかお前は猿の積重ねた其の枯枝の山に火をつけてくれ。』

狐も兎の頼むまゝ、にその枯枝の山に火をつけた。火は見る見るうちに焰々と燃上つたのぢや。兎はじつとその火の

「じつとその火の燃」

燃上るのを見てゐたがな。いきなりその火の中に飛込んで
いふには、

上るのを見てゐた
がな」

『氣の毒な旅のおぢいさま、わたしは馬鹿で働がなうて、何も
してあげられません。どうか、せめて此の私の體の焼ける
のを待つて、此のわたしの肉を食べてくだされ。』

かうして兎は、われとわが身を火の中へ投込んで、焼かれて
死んだのぢや、

それを見てゐなされた乞食の姿をした神様はな。

『あゝ、かはいさうな、しかし、えらい兎さんぢや、いかに何で
も、わしはそのやうな美しい心を持つたお方の肉などが食
はれようか。』

かうおつしやつて、泣く／＼その焼けたゞれた兎の死骸を

「死骸を抱上げ」

抱上げ、そのまゝ、再びもとの神様の御姿にならしやつて、天へ
昇つて行きなされた。さうして其の兎の死骸を月のお宮に
お祭りなされた。

それがその、月の兎といふことの起りぢや。あの、それ、お前
たちもお月様が出なされるたんびに、その中に兎のをるのを
見るだらう、あの月の兎の、これが話なのぢや。」

良寛さまはこのやうな噺を子どもたちに聞かせてから、更
にいひました。

「どうぢや、お前たち、面白かつたかの。」
しかし、良寛さまのその間に對して、誰一人答へるものがあ
りませんでした。子供達はみんな涙ぐんでゐました。中に
は聲を出して啜り泣きをしてゐる子もありました。良寛さ

「良寛さまも」

まも、話しながら眼に涙を一ぱい溜めてゐたのでした。

「どうぢや、面白かつたかの。」

良寛さまは重ねてたづねました。併し、一人としてそれに答へる子供はありませんでした。さすがに永い春の一日も、いつしか暮近くなつてゐました。越路の春は、夕暮となると風の寒さが肌にしむのでした。

「あゝ、もういつの間にか日が暮れかけて來た。ながいこと遊んだものぢや。どうぢや、お前たちもそろそろ歸らんかの。家の衆が待つとるだらうに。」

良寛さまは、やがてかういつて、かたへに置いてあつた鐵鉢と錫杖とを取上げました。子供たちも無言のまゝ、一人又二人立上つて、堂の縁から下りました。(良寛坊物語)

* 越路

* 家の衆

* 鐵鉢

* 錫杖
* 無言のまゝ

九千本松原

伊藤左千夫

沼津の町の細い横丁を二曲り三曲りして、昔の東海道へ出た。右へ少し行つて町を出てしまふと、小さな川がある。子持川とかいふさうだ。此の川の縁を行くと、千本松原はすぐ眼の前に横たはつてゐる。幾萬本あるか分らぬ程の松が背くらべをして、雲を突いてゐる。天氣が曇つてきて雨模様であるから、松の梢が雲に届いて居るやうだ。
松原の中へ這入つてみると、外から見たよりも一層立派な松原である。三かゝへもある古木が相競うて十丈以上に高く立つて居る。其の壯快な趣は何とも形容が出来ない。根上りの松も、庭の植木や盆栽の不自然なのは極めて厭味な

伊藤左千夫 本名幸次郎。歌人。大正二年歿、年五十。

沼津 静岡縣の市。舊東海道五十三次の一驛。

昔の東海道 徳川時代の江戸より京都に至る街道。

子持川 千本松原と沼津市街地との間を流る。

千本松原 沼津市に屬し、駿河灣に臨む海濱の總稱。今公園。

「松が背くらべをして、雲を突いてゐる」

「壯快な趣」

* 根上り
* 厭味

のであるが、此處では風が砂を吹きさらつて、自然に根上りとなつて居るので頗る趣がある。巨大な幹や、繁り繁つた枝や葉をしつかりと支へて居る根張りの力が、十分其の形に顯はれて居る。實に見る眼も氣持がよい。

松原を出ると、芝原に空屋らしい家が一軒ある。其の前を通つて波打際へ降りて見る。海は極めて穏かで、伊豆の眞城山・大瀬崎など手に取るやうに見える。西の方、久能山・三保など薄黒い雲のやうである。のたり／＼と波がよせる。潮水は透明で、底の砂利が美しく見える。予は白い小石を拾ひ、赤い小石を拾ひ、青い小石を拾ふ。白いのが最も美しい。水中に在るのが殊に美しく見えるので、波の引いた處へつけ入つて取らうとする。復波がすぐ寄せて来る。波が引く、取らう

眞城山・大瀬崎 静岡
岡縣田方郡
久能山・三保 静岡
縣安倍郡
「のたり／＼と波がよせる」

とする。復波がすぐ寄せ返す。到頭片足の足袋を濡らしたが、其の小石は取れなかつた。波が石を惜しんでゐるやうだ。

千本松原



三十間許りの沖を、鵜が三羽かづいては泳ぎ、かづいては泳ぎ、東の方へ泳ぎ行く。鈴川の邊から小舟が二艘、ゆた／＼と櫓を押しして来る。のたりのたりの波と能く調和して居る。煙のやうな風が吹いて、天氣が一層ぼんやりとして来た。

予は六代松を見る心組であるから此の邊から上つたらよからうと氣づいて、松原に向つて上つた。松原を通り抜けて里へ出る

「波が石を惜しんでゐるやうだ」

* かづく

鈴川 静岡縣富士郡
元吉原村にある舊
宿場。

六代松 平維盛の長
子六代、平氏滅亡
の後此の地にて將
に刑せられんとせ
し時、鎌倉より赦
免の使者到着して
刑を免れし遺跡。
* 心組

道がついて居る。其の路端の松の中に荷車を置いて、づんぐりとした親爺が、砂利を磯から荷車へ運んで居る。予が其の親爺に六代松の所在を尋ねると、親爺は先づ鉢巻の手拭を外し、姿勢を正して答へた。

「はい、六代松で御座いますか。私は此の村の者ではありませんが、人様に尋ねられてもと思ひまして聞いて置きました。六代松と申しても松はありません。あそこに墓場があります。向うの垣根と墓場との間を右へ曲ると、小さい森が見えます。其の森の中に標の石が立つて居ります。はい。」

予は其の篤實なるに深く心を動かしたのである。なる程、六代松といふ松は無い。常磐木の小さなこんもり

「姿勢を正して答へた」

*篤實

とした森の中に、さゝやかな石が立つて居た。非常に大きな松があつたとの事だが、今は其の根株の跡も判らぬ。幾百の生首を一まとめにして埋めた事跡とは反対で、危き命が助かつた入の喜、其の従者どもの喜、助けた人は勿論、守護の任に當つた北條主従に至るまで嬉し涙にくれた様、眼の前に見える心持がするのである。予は松原の中を縦に通つて居る道を歸つて来る。女子供の松葉を搔いて居るのが幾組もある。道理で松原は塵もとめぬほど掃除されてゐる。此の松原について大いなる愉快を禁じ得ぬ事があつた。それは十餘町も往復する間に、松葉搔に幾組も出逢つて、此の地方の者が松原で焚きつけを求めることが知れたに拘らず、

助かつた人 六代、
従者ども 齋藤五、
齋藤六、
助けた人 文覺上人、
北條主従 北條時政、
主従。

篠一本、小松一本、刃物を以て切つた痕を見なかつた事である。予は斯く心づいてから餘程注意して見たが、遂に切取つた痕も折取つた跡も認め得なかつた。如何にも人氣が篤實な地であるといふことが明かに察せられる。此の立派な松原が少しも損はれずに今日に傳はつたのも、決して偶然では無い。官林の事であるから、妄りに竹木を切つてはならぬとなつて居るには相違ないが、人氣が篤實でなくて、どうしても其が行はれよう。何の辨へもない兒童に至るまで、少しも其の禁を犯さぬといふのは、理窟の力でなくて、民衆の美質に由ること。疑ふ餘地もない。始めて沼津に来て、何とはなしに平和の趣を感じた予は、今それを知識的に觀察し得たのである。富士の眺も美しい。靜浦の眺も美しい。千本松原も美しい。

「切つた痕を見なかつた」

* 人氣

* 偶然

「何とはなしに平和の趣を感じた予は」

* 知識的に

靜浦 千本松原より

併しながら沼津の人氣の篤實な眼に見えない美しさには迎も及ばないであらう。

此のやうな事を考へながら急いで歸つて來ると、雨がぼつぼつ落ちて來た。予が松原を出ようとする、と松林の小高いところに十二三の男の兒が三人遊んでゐる。其處に居た犬が予を見て俄に吠えだして、予に向つて走つて來る。男の兒は頻りと犬を叱る様子であつたが、予は犬の吠えるのには眼もくれないで出て來る。犬は益々吠える。やがて男の兒は走つて來て、犬を捕へて吠えさせない。予は茲にも一點の美を認めて、もと來た子持川の脇へと出た。見渡した沼津の宿はほんのり霞をこめて、春雨が靜かに降つて居るらしい。

東南。伊豆に近き海濱。「眼に見えない美しさ」

「犬を捕へて吠えさせない」

「春雨が靜かに降つて居るらしい」

(左千夫全集)

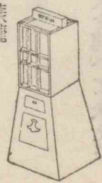
二葉亭四迷

春雨のしとくと降る薄ら寒い或夜の事であつた。私は例の通り宵の口から寝て了つた。ふと目を覺ますと、有明が朦朧と照らして、四邊は微暗く寂然としてゐる中で、耳元近く妙な音がする。或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて宛然大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。何だらうと思つて耳を澄ましてゐると、時々其の音がわれとわが單調さに厭いたやうに、忽ち慣れた調子を破り、凄まじい障子の紙の共鳴りをする音を立てて勢ひ込んで何處へか行きさうにして、忽ち物に行當つたやうにはたと止む。と、しばらくひつそりとなる。その側から直ぐ又穩かな音が遠方に聞え出して、それが

二葉亭四迷

二葉亭四迷 本名長谷川辰之助。小説家。明治四十二年歿、年四十六。

有明(有明行燈)



朦朧

「障子の紙の共鳴りをする音」

次第に近くなり、荒くなる。私は夜中に滅多に目を覺ました事が無いから、初はひどく吃驚したが、能く研究して見ると父の軒なので、やつと安心して其の儘再び眠らうとしたが、寝付かれないので聞える儘に其の音に聽入つてゐると、思ひ做しで或は遠雷のやうに聞え、或は又浪の音のやうに聞える。それに耳をすましてゐると何時からとなく、それに混つて、間の手のやうに、遠くから幽かにきやん／＼といふやうな音が聞える。ごうといふ凄まじい音の時には、それにけおされて聞えぬが、すうといふ溜息のやうな音になると、それが判然と手に取るやうに聞える。不思議に思つて、益々耳を澄ましてゐると、次第に大きく高くなつて、確に門前に聞える。

「間の手のやうに」

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、けたましくきやんくくと啼立てる。その聲尻がやがてかぼそく悲しげになつて、滅入るやうに遠い遠い處へ消えて行くかと思へば、忽ち又近くで堪へ切れぬやうに啼出して、くんくんと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

私は元來動物好きで、就中犬は大好きだから、近處の犬は大抵馴染だ。けれども、こんなかよわい、いたいけな聲で啼くのは一疋も無い筈だから、不思議に思つてそつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの、寝られないのかえ。」

と、母が寝反りを打つて此方を向いた。私は此の返答は措い

「疑もなく小狗の啼聲だ」

* 聲尻
* 滅入る

* 馴染
「そつと夜着の中から首を出す」

* 措く

て、



「あれは白ぢやないねえ、大層小さい狗の聲だねえ。如何したんだらう。」

犬 「棄狗さ。」

「棄狗つて……何」

「棄狗つて……誰かが棄ててつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄ててつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの入さ。」

「何處かの人が狗を棄ててつた。」

「棄狗つて……何」

「大方何處かの……何處かの入さ」

と、私は二三度繰返して見たが分らない。

「如何して棄ててつたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない。何處までも相手になつて、其の意味を説明してくれて、

「もう晩いから黙つてお寝。」

と、優しく言つて、又彼方を向いて了つた。

私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか啼聲が稍遠くなるにつれて、又父の躰がうるさく耳に附く。寝られぬ儘に、私は夜着の中で今聞いた母の説明を繰返しく、味はつて見た。まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。

小ぼけなむくくしたのが重なり合つて、首を擡げて乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、其の側へどさ

母の説明を繰返し繰返し味はつて見た

擡げて

りと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから舌の先で他愛もなく、ころくくと轉がされる。轉がされては大騒ぎして起返り、又よちくと這寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て慌てて吸付いて、小さな両手で揉立てく、吸出すと、甘い温かな乳汁がどくどくと出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。と、腋の下からまだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んで來る。奪られまいとして、産毛の生えた腕を突張り大騒ぎをやつてみるが、到頭奪られて了ひ、又其處らを探ねて、他の乳首に吸付く。其の中に親の肌で身體も温まつて、溶けさうな好い心持になり、ついうとくとなると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてて又吸付いて、一しきり

*他愛もなく

「ついうとくとなる」

吸立てるが、直に又他愛もなくうとくととなつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで一向正體がない。其の時忽ち暗黒から節くれだつた大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つてゐる所をむずと引摺み、宙に吊す。驚いて目をぼつちりあき、いたいな聲で悲鳴を揚げながら四足を張つて藻掻く中に、頭から何かで包まれたやうで眞暗になる。窮屈で息氣が塞りさうだから、出ようとするが出られない。暫く藻掻いて居る中に、ふと足掻が自由になると、領元を摺まれて、高いと處からどさりと落された。うろくとして其處らを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよばたれ、怕ろしく寒くなる。身慄ひ一

「宙に吊す」

*藻掻く

*茫然

*怕ろしく

つして、くんくと親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れてよちくと這出し、雨の夜中を唯ひとり温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潜り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

「阿母さんく、門の中へ入つて來たやうだよ。」

と、私がか居堪らないやうな氣になつて、又母に言掛けると、母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「乳房を慕つて」

「何だか居堪らないやうな氣になつて」

*見よう

「だつて——あら、あんなに啼いてる……。」
 と、折柄絶入るやうに啼く狗の聲に、私は我知らずむつくり起
 上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見よう……。」

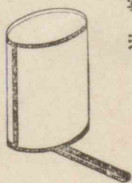
「本當に仕様がなない兒だねえ。」

と、小言を言ひく、母も澁々起きて雪洞ほんぼりをつけて起上つたか
 ら、私も其の後について、玄關——と云つてもつい次の間だが、
 玄關へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰
 ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちらくちらくと靡く。其
 の時小さな鞠のやうな物がつと軒下を飛退いたやうだつた
 が、臆て雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の暗黒

*絶入る。
 「我知らずむつくり
 起上つた」

雪洞



*履脱

「千切れさうに掉立
 てて」

「青貝のやうに列べ
 て光らせてゐる」

を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照らし出した
 處を見ると、つい其處に生後まだ一箇月も経たぬ、むくむくと
 肥つた赤ちやけた狗兒が、小指程の尻尾を千切れさうに掉立
 てて、此方を瞻上げてゐる。形體は私が寝てゐて想像したよ
 りも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよばたれて、泥だら
 けになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫を垂ら ぼ
 つちりと兩つの眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。
 「おや、まあ可愛らしい……。」
 と、母もつい言つて了つた。
 況や、私は大好きだ。じつとして視ては居られない。母の
 袖の下から首を出して、ちよつくと呼んで見た。
 が、左程畏れた様子もなく、ちよこくと側へ來て、流石に少

*流石

し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を下からぐいぐい推上げるやうにしてべろくと舐廻し、手をくれる積りなのか、頻りに圓い前足を舉げてばたくやつてゐたが、果はやんはりと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて堪らない。母の面を瞻上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけど、居附いて了ふと仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來てくれた。

早速履脱へ引入れて之をあてがふと、小狗は一寸香を嗅いで、直ぐ甘さうに先づびちやくと舐出したが、汗が鼻孔へ入

「痛まぬ程に小指を咬む」

*鼻聲

「仕方がないねえ」

「それでも」

ると見えて、時々くしんくと小さな嘔をする。忽ち汁を舐盡くして、今度は飯に掛つた。他に争ふ兄弟もないのに、切りに小言を言ひながら、がつくとたべ出したが、飯は未だ食慣れぬかして、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事ではなかく取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の隙に私は母と談判を始めて、今夜一晚泊めて遣つてと、雪洞を持つた手にぶらさがる。

母は一寸澁つたが、もう斯うなつては仕方がない。「阿父さんに叱られるけれど。」と言ひながら、棧俵法師を捜して來て履脱の隅に敷いて遣つた。――は好かつたが、其の晩一晚啼通されて、私は些とも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言は

*棧俵法師

れたさうな。犬嫌ひな父は、泊めた其の夜を啼明かされてうんざりして
了つて、翌日は是非追出すと言出したから、私は小狗を抱いて
逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐ
たが、しかしそれも一時の事で、其の中には小狗も獨寢に慣れ
て夜も啼かなくなる。と、追出す筈のものに、何時しか「ボチ」と
いふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒になつて捜す
やうになつて了つた。

(平凡)

小草わかば黄なる小犬の飛び跳ねて走り去りけり
微風の中 (北原白秋)

北原白秋 名は隆吉。
詩人。明治十八年
生。

*うんざり
「小狗を抱いて逃廻
つて」

二 筍

薄田 泣菫

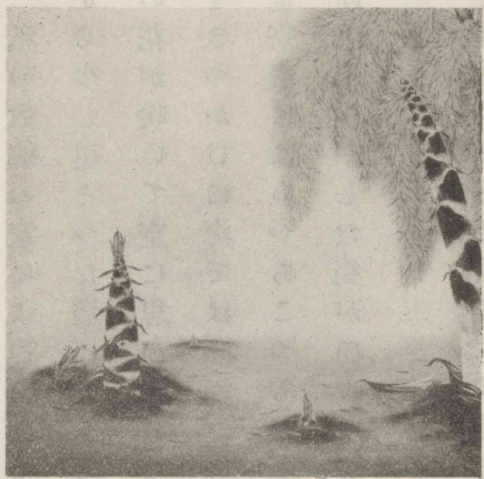
私の故郷の家には、地續きに小さな孟宗竹の藪があり、それ
から少し奥まつた邊に、やゝ大きい眞竹の藪があります。櫻
の花が咲いて、空に思ひがけない春雷がごろ／＼鳴ると、それ
をきつかけに、海では櫻鯛が網に上ります。その頃になると、
孟宗藪にはあつちこつちにもく／＼土が持上つて、赤茶けた
産毛を生やした筍がひよつこり頭を擡げかゝります。
「あゝ、筍が……」

私はそれを見附けた瞬間、いひ知れぬ歡喜に胸をふるはせ
たものです。筍は私にとつては狗ころと同じやうに、短い産
毛を生やした動物であつたのです。私は草履を穿いたまゝ、

薄田泣菫 名は淳介。
詩人。明治十年生。

孟宗竹 江南竹、イ
ネ科に屬する多年
生常緑木。支那の
江南地方の原産。
眞竹 禾本科に屬し
本洲中部以南の山
や畑などに栽植す
る、竹類の一種。
櫻鯛 春暖と共に陸
地近く群來する鯛。
淡紅の鮮かな色彩
が櫻花の爛漫たる
に似てゐるとして名
づけられた。
「もく／＼土が持上
つて赤茶けた産毛
を生やした筍が」

垣のこはれから鰻のやうに藪の中に滑り込みましたが、あつちでも、こつちでも、筍の縮れつ毛の頭を見附けると、自分の踏



(筆習子倉郷)

た。かうすれば、通りがかりに竹藪を覗いて見る悪戯つ兒の狡い眼からも遁れられるし、また日光をぢかに受けなくて済

んでゐる草履の下からも、今にもむつくり赤土が持上りさうな気がして、足の裏が擦つたくてたまらなかつたのを覚えてゐます。私はそこらの草を掻集めて来て、一握りづつそれを筍の上に被せてやりました。

「足の裏が擦つたくて……」

「筍の上に被せて」

* 狡い

* 出来るし

むので、中味の肉が永く柔かさを保つことが出来るしするからでありました。

それから、私は毎日幾度かこつそり藪へ滑り込んでは、人知れずどんなに筍の生長を楽しんだものでせう。親に隠れて物置小屋の狗ころを愛撫するのと同じ心持です。狗ころが見る度に太つて行くやうに、筍もその度に寸を伸ばして行くやうに思はれました。實際筍の生長ほど目覺ましいものはありません。午前と午後とでは五寸以上も身丈が異なつてゐるやうなこともありました。私はそんなことをしてはならないと思ひながら、時々抑へきれない欲望に驅られて、筍の背を手の平で撫でまはしてみたり、又肩へ手を掛けて一寸揺ぶつてみたりしました。筍は強健な脊髄をもつてゐるや

「狗ころを愛撫する」

* 目覺ましい

「一寸揺ぶつてみたりしました」

* 強健

うに、びくともしませんでした。

「大きくなれ。大きくなれ。」

私はかういつて土に生えた狗ころに挨拶しながら、また元のやうに青草をその上に被せ掛けて置きました。

やがて筍掘りの時節が到来します。

寶島寺の寂嚴上人は、ある人から、

「和尚さま、味噌を搗きますには何の日が吉日でございませう。」

と訊かれたのに答へて、

「さればさ、麴のよく熟した日が吉日であらうな。」

といつたさうですが、筍掘りにもそれ／＼吉日があります。

それはこちらが掘りたくて、もう待ちきれなくなつた日であ

寂嚴上人 禪僧。備

中國の人。明和八

年(西三)寂、年七

十。

*搗く

「麴のよく熟した日
が吉日」

ります。私は筍の毛皮を損ねないやうに、周囲の土を掘下げて行きました。掘つて／＼筍のお尻が見えないので、思の外大きいのにびつくりすることも度々ありました。

狗ころを乳離れさせるには、母親と子供との感情を餘り痛

めないやうに心掛けなければなりません。筍を掘るにも、な

るべく親竹とその子供とに痛みをこしらへないやうに工夫

しなければなりません。筍の親竹に著いてゐる處を發見し

て、そこへ鋤の刃をうまく打込むと、筍は尻つぼを振らないの

が不思議に見えるほど、／＼と勢ひ込んで地べたに轉が

り出します。

掘残された筍は、毎日のやうに寸を伸ばし、尺を伸ばして行

きます。身丈が伸びると共に、下から／＼古い毛皮を脱捨て

「尻つぼを振らない
のが不思議」

て行きますので、その後から湯上りのやうな新鮮な若竹の肌
 が、五月の日光に痛々しいまでに輝いてゐるのが見られます。
 昔五合庵の良寛上人は、自分の坐つてゐる疊を破つて頭を持
 上げた筈のために、天井に抜穴を拵へてやらうと蠟燭の火を
 いぢつてゐるうち、過つて庵を焼いてしまつたさうですが、若
 竹にならうとしてゐる頃の筈ほど、力と新しさと愛とに富ん
 だものはありません。
 やがて節々からは枝が伸び、枝からは葉が伸びて、朝になる
 と、その葉の先から酒の雫のやうな露が滴り落ちます。五月
 の新鮮な爽やかな風が愛撫するやうに吹きかゝると、葉も、小
 枝も、幹も、恥づかしさうに、無言のまゝ、しなやかに躍ります。
 (太陽は草の香がする)

「湯上りのやうな新
 鮮な若竹の肌」

良寛上人 禪僧。歌
 人。越後國の人。天
 保二年(西元)寂、
 年七十五。

「恥づかしさうに、無
 言のまゝ、しなや
 かに躍ります」

三 國 境

北 原 白 秋

私は國境安別の砂濱に立つた。上つて見ると、沖から見た
 通りの荒涼たる寒村であつた。
 とうとう國境まで來たのかと思ふと、ひえんと私は雨の
 湿りに顫へたが、また子供のやうに、そこらを駈廻りたくもな
 った。
 「や、車前草だ。素敵々々。」
 それは樺太車前草とでもいふのだらう、すばらしく大きな
 葉だ。それが踏めば實に柔かな緑を輝かしてゐる。砂濱か
 ら一段上ると、その車前草に縁どられた徑が續く。大勢通つ
 たので、ひどい泥濘になつてゐるので、私は草の上を歩く。

北原白秋 名は隆吉。
 詩人。明治十八年
 生。

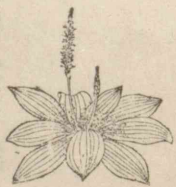
* 國境

「荒涼たる寒村」

「ひえんと私は雨
 の湿りに顫へた」

「子供のやう」

車前草 おほほこ。
 オイバ科に屬す
 る多年生草本。



「や、驚いた、馬鈴薯の花だな。」
内地では五、六月ごろの薄紫の馬鈴薯の花だ。蕊の黄色い新鮮な花。

「や、菜の花だな。これは驚いた。」

とある漁師の家の窓から、女の子がたつた一人、面を出してゐた。その前の畑には、いかにも、雨に濡れた黄色の菜の花が咲き群れてゐた。それに豌豆の花。背の低い唐黍。葱坊主。その他鮮かな野菜の花。この暮色と初夏との色。
私は又びしや／＼と緑の上を歩いてゆく。雨が次第にあがりかけて来たが、まだ横なぐりに吹きつけることがある。間を隔ててぼつり／＼と駐在所があり、郵便局があつた。それはバラック式の果敢ないものであつた。以前に國境守

「たつた一人、面を出してゐた」

*横なぐり

*駐在所

護の駐屯兵が住むために急造したといふ小舎のまゝである

らしかつた。東洋風の簡素なものだ。

だが、何といふ巨大な虎杖いたざしであつたらう。それらの小舎の

うしろ、丘の崖から下の裾まで叢生した虎杖の、早くも蟲がつ

いて黄ばみかけた葉の間は、今まさに淡黄緑の花盛であつた。

それに丈の高い女郎花に似た黄色い草花の目覺ましさ！

私はまた立ちとゞまつて、これ等の始めて見る樺太の景趣に

目を圓くした。

それは／＼燃立つやうな細い赤い實の、つや／＼と群つた

名も知らぬ木の藪があつた。

「あれは何の實。」

「な、かまど。」

*駐屯兵

虎杖 タデ科に屬し
山野に多き多年生
草本。莖の高さ五
〇厘乃至一米。夏
日白色又は淡黄緑
の小花を開く。

*女郎花 をみなへ
し
「始めて見る樺太の
景趣に目を圓くし
た」

な、かまど 七竈

と、一人の男の子が私の間に答へた。

風と雨とがまた激しく音を立て始めた。

「おゝい、おゝい。」

前から後から、わが団員の數々が、その風と雨と、しぶきで飛んでゆく霧の中から呼び應へる。

かうして、私たちは國境の天測點へと、草ばかりの一つの丘の頂邊を目ざして、泥濘のひどい小徑をうねり／＼して登りかゝつたのである。

そこらは虎杖の花盛であつた。樺太虎杖の花は、内地で見るやうな、ほの／＼とした淡紅色を含めてゐないが、その縁がかつた薄黄は、却つて度ましくてあはれであつた。それが雨と霧とに、濡れしづくになつてゐるのである。



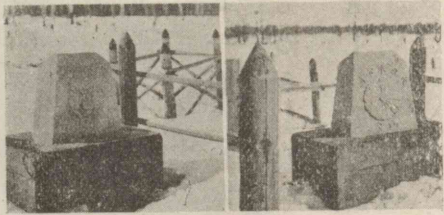
微蕾科裂屬の落葉喬木で幹の高さ六一八米。五六月の候、白色の小花を開く。

「しぶきで飛んで行く霧」

天測點 天測境界點。天文測量に依つて境界の基礎を定めた地點。

* 度ましく

太い丸太の無造作な二坪ばかりの周圍の棚があつた。その棚は朽ちかけて、既に外皮の處々はボロ／＼にくづれかけてゐた。その中に日本と露西亞との境界標石が嚴然と立つてゐるのだ。正方形の臺座に据ゑられた鼠色のその標石は、高さは二尺にも満たないであらう。北面に鷲、南面に菊の御紋章が浮彫りにしてあつた。私は露西亞領の虎杖の草叢にもはひつて見た。



日・露境界標石

北を眺めると、その海岸線は南と同じやうな、さして高からぬ丘陵が續いて、立枯れのとど松の疎林が、しきりなく流れる雨雲の下にほう／＼と打煙つて見えた。寂とした國境であつた。(フレップ・トリップ)

「境界標石が嚴然と立つてゐるのだ」

「露西亞領の虎杖の草叢にもはひつて見た」

* ほう／＼
「寂とした國境であつた」

一三 たんぼ

若山 牧水

若山牧水 名は繁。歌人。昭和三年歿、年四十四。

廢れたる園に踏みいりたんぼの白きを踏めば
春たけにける たけ 北原白秋

何といふ上品な美しい歌であらう。

つと、とある庭園に足を踏みいれると、そこら一面にたんぼ
ぼが咲亂れてゐる。その花を踏みつゝ立つてゐると、嗚呼、も
う春も暮れるのだといふ、暮春の感じが油然として胸の底か
ら湧上つて來るといふのである。

まことに、言葉に一分のたるみもない。「踏みいり」などとい
ふのも、決して不用意に使はれたものではない。單に入りゆ
き「などといふのでなく、踏みいり」とあるので、其の時の作者の

北原白秋 名は隆吉

詩人・歌人。明治

十八年生。

* 春たける

* つと

* とある

* 油然

「言葉に一分のたる
みもない」

歌
墨
妙

心が何かしら興奮して、いら／＼してゐたらしく感ぜられる。
「白きを踏めば春たけにける」といふのでも、そのやゝ硬い古風
な言ひかたの中に、言ひ知れぬ緊張と、しんとした氣持とが含
まれてゐるではないか。

いつしかに春の名残と

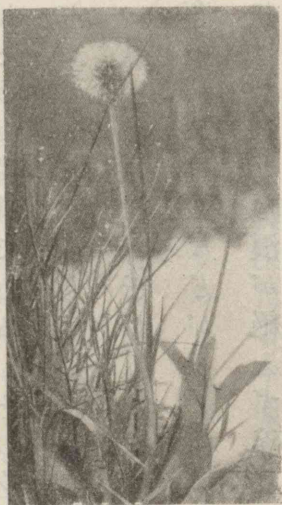
なりけり昆布乾場の

たんぼの花

ある海邊にての作。

ぶら／＼と散歩の途か何

かに、とある荒磯の昆布乾場に出た。ふと見ると、そこらに一
つ二つたんぼの花が咲いてゐる。「お、もういつか、これが



たんぼ

「春の名残」

「言ひ知れぬ緊張と、
しんとした氣持」

春のなごりとなつたのかなあ。」といふ意味であらう。單純な歌ではあるが、これなどは最も私の愛誦する一首である。昆布の採れるところといへば、どうせ荒磯である。その乾場は砂の上か、岩の上か、いづれにせよ、とげ／＼しい荒砂か、眞黒な岩の上か、と見てよからう。其の時、昆布が干してあつたか如何かはとにかく、いづれ昆布の切や、貝殻などがそこらに散亂してゐたに相違ない。渚にはかなりな浪が絶えず碎けて居り、霞みながらも、沖の方には大きなうねりが動いてゐる。其處へぼんやりと立入つて見ると、これはまた思ひがけなく、黄色い花が砂をひいて、其處此處に咲いてゐる。過ぎ去つた春を思ふ心に燃えてゐる眼に、その二三の可憐な花が、どんなに強く映つたことであらう。

*とげ／＼しい

「過ぎ去つた春を思ふ心に燃えてゐる眼」

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし
畑の黄なる月の出

畑には青い幹と葉を思ふさま生ひ伸ばして、蜀黍が高々と茂り合つてゐる。夏の初の靜かな夕方で、その葉先にはもう露でも宿りさうだ。折しも月はこの廣漠たる平原のはての低い空に漸く黄な色を鮮かにして照りそめようとしてゐる。其處に一人の少年が佇んでゐる。手足の細い、色の青白い病兒である。晝間からたつた一人で、しきりに細々とハモニカを吹鳴らしてゐたのであつたが、もう夜にならうとするのに、一向氣もつかぬげに、猶しんみりと幼い單調な樂器を唇頭から離さうともしないといふ敘景の歌。同じことでも、た

*思ふさま

*細々と

「幼い單調な樂器」

*唇頭

*敘景

つぷりと新味を湛へて歌つてある。

石がけに子ども七人腰かけて河豚を釣り居り夕
やけ小やけ

「夕焼小焼」は、よく子供たちが夕焼のした時に唄ふ歌である。それをそのまま持つて來てゐるのだが、それがいかにもよく調和してゐて、わざとらしくないばかりか、その句があるために夕焼小焼のした海邊の崖に、多くの子供が一心になつて魚を釣つてゐる景色が、はつきり水の滴るやうに歌ひ出されてゐる。

この日頃ひそかに胸にやどりたる悔あり我を笑

はしめざり 石川啄木

事々しく取出して言ふ程のことでもないが、此の頃、自分の心の奥には、人知れず氣にかゝつてゐて離れない一つの悔がある。あゝせねば善かつた、あれは全く自分が悪かつたと思ふ。それが事につけ、折にふれ、絶えず氣がかりになつて、今は氣輕に笑ふことをすら許されなくなつたといふのである。かうしたことは、誰にでもよくある事である。大概の人は、かういふ時には、自分で自分の心を瞞着して、或は無雜作に打忘れて、その悔を悔とせずに通してしまふ。併し、この作者はさうではなかつた。自己に對して何處までも眞面目な作者の性格は、此處にも窺はれるであらう。

「たつぷりと新味を湛へて」

「夕やけ小やけ」

「水の滴るやうに」

石川啄木 名は一。歌人。明治四十五年歿、年二十七。

*瞞着

「自己」に對して何處までも眞面目な…性格

心理 描写
心身 描写

新しきからだを欲しと思ひけり手術の傷のあと
を撫でつつ

この歌は、啄木が晩年に腹膜炎で切開手術を受けた後の作
で、意味は説明するまでもなく明かで、真に何氣ない風に歌つ
てあるが、生まれもつかぬ傷痕をもつ人の痛ましい心がよく
表はれて居る。その「新しきからだを欲し」と歌ひ出して、傷の
痕を撫でつつ」としみと」とした姿を描いて居るのに注意し
なければならぬ。又、この歌では單に肉體の傷であるが、心
に傷を負うた場合にも、人はやはりこのやうな感を抱かずに
は居られないだらう。さういふ風にして見ると、この歌には
なかく深い味はひがある。

「新しきからだ」

「心に傷を負うた場
合にも」

人々の心をなやませる

稀にあるこのたひらなる心には時計の鳴るもお
もしろく聴く

「たひらなる心」

自分としては極めて珍しいこの平靜な心には、平生聞馴れ
てゐる時計の音までが如何にも興味深く聞きなされるとい
ふのである。この歌を味はふと、深い大洋の底に、一尾の魚が、
靜かに尾鰭を収めてじいつとしてゐるかのやうな、靜かな懷
かしい印象を受ける。さうして、かうした場合にあつた作者
を想像することによつて、我等はおのづと我みづからを懷か
しむ心の涌いて來るのを覺える。

「我みづからを懷か
しむ心」

やや朝鮮服が立つて居り白くぼんやりとあさの
みなとに 土岐哀果

土岐哀果 名は善麿。
歌人。東朝日新
聞記者。明治十八
年生。

かうした調子の歌は珍しい。朝鮮海峡を夜の間を渡つて
 ほどなく釜山に上陸しようといふので、夜の引明けの甲板に
 出て舳の方を眺めて立つて居ると、次第に港は近づいて来る。
 その港の岸に、や、や、居たぞ、朝鮮服が。」といふのである。嚴密
 に言へば、三十一文字になつてゐないが、自然に出て來た聲の
 調子の中に却つてそれよりもよく調つた節奏がある。

(和歌講話)

良寛の歌に「やまかげの石間をつたふ苔水のかすか
 にわれは住み渡るかも」といふのが、歌の道は凡
 そ斯の如きものである。たゞ謙虛の心を以て人の世
 に處し、自然に對し得る、辛抱づよい少數の者だけが、こ
 の道に入る可きであらう。(土屋文明「短歌入門」の文に依る)

釜山 朝鮮全羅南道
 釜山府。下關との
 間に連絡船があ
 る。

*夜の引明け

「自然に出て來た聲
 の調子」
 「調つた節奏」

土屋文明 歌人。
 明治二十四年生。

一四 京城の郊外

安倍能成

京城は東、北、南と山に圍まれて、大體西が漢江の方に傾いて
 居るのであるが、この古い城壁を頂いた三方の山と、洋々たる
 漢江の水の彼方にも、山があり、その山が多くは花崗岩で、岩は
 風霜にさびて鐵色に黒ずみ、砂は白く、泥は乏しく、到る處の山
 間には掬すべき清流がある。私は四國の平和な小都會に生
 まれて、少年の時小春の時節には、よく親しい家の「おなぐさみ」
 (ヒクニック)に招かれたが、京城のぐるりや近くの小山を踏む
 時、いつも其等の小山を思ひ出す。東京への歸途下關から廣
 島あたりまで、中國の山河を車窓から眺める時、その氣候の溫
 和と人間の努力とによる草木の繁茂と田畑の整美とも拘

安倍能成 哲學者。
 京城帝國大學教授。
 明治十六年生。

京城 朝鮮京畿道漢
 江の中流に位し、
 總督府の所在地。

漢江 朝鮮屈指の大
 河で、大白山脈中
 の五臺山に發し、
 江華灣に注ぐ。

*掬す
 小都會 愛媛縣松山
 市。

*ぐるり

下關 山口縣下關市。
 山陽本線の終點。
 廣島 廣島市。中國
 第一の都會。

*整美

らず、素人目にもこの邊の土質が朝鮮と似て居ることを著しく感ずるが、花崗岩に富める四國の北部の小山にも、やはり朝鮮と共通な點があるらしい。白い石英の細片を皮にした赤土山、まばらに小松を載せた明かるい色、斜面を下りても適度な砂の和かさの爲に足場の滑らぬ心安さ、雨の後にもぬかるみにならずに、踏みしめる靴の力を土がや、弾く様な快感などから、京城の小山を歩きつゝ、少年の遠き夢を想ひ起すことも少なくない。かういふ山の高いのになると、風化や水化の爲か、赤土が眞白になつて、砂の色はまるで白砂糖の様である。かういふ樹木の少ない禿山の白い砂と青い空とが、山の頂のあたりで相映發する姿は中々美しい。

かうした小山と小山との間には、大抵小さな清らかな溪流

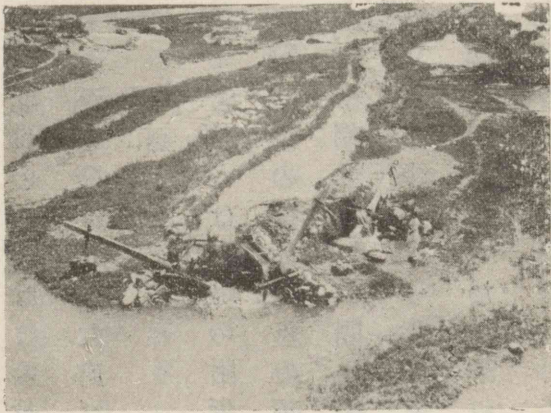
*素人目

「少年の遠き夢」

*風化
*水化

*映發

がある。それは極めてさゝやかなものであつても、朝鮮の女達はそこを洗濯の場所にすることを忘れない。それは随分山の上の方までに及び、花崗岩の上に白い衣を乾した景色は、百人一首で少年の頃からおなじみの持統天皇の御歌を思ひ出させる。岩に湛へられた折角の清水が洗濯用のソーダの爲に鈍く濁つて居る光景なども、京城の郊外の山里の到る處に見られる。けれどもかうした清い溪流に沿つた山村の景色は、兎も角



(濯洗) 俗風鮮朝

「洗濯の場所」

持統天皇の御歌 百人一首に「春すぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山」

も美しく平和で、山にもう少し樹木が多く、民家ももう少し豊かであつたならば、武陵桃源の里を思はせる様な景色は随分多い。差向き京城の東小門に近い城北里の如きは、この貧弱な武陵桃源の實例である。かういふ溪を登りつめた處には、大抵寺か庵かがある。

小さな山ばかりでなく、大きな山でも、例へば京城の附近でいへば北漢山、道峯山、佛岩山、水落山、冠岳山の様な山々の、頂近い景勝の地にはどこにも寺がある。李朝五百年の間、朱子學の爲に佛教は壓迫を受けて、例へば京城市中には一寺をも見ない様な状態ではあるが、併し朝鮮で人間の造つた建築が處を得て自然と相調和して居る姿を求めれば、宮殿を除いては先づやはり佛寺の外にはあるまい。

武陵桃源 支那湖南省にある。秦民の亂を避けて住んだ地。傳説化して、仙境を傳へられる。

*差向き

東小門 府を圍む城壁の東北隅にある小門。

城北里 京城北方の郊外。

北漢山・道峯山・佛岩山・水落山・冠岳山

何れも京城を圍んで附近に聳える山。

李朝五百年 太祖李

成桂朝鮮を建てて(一〇五)以來明治四十二年(三三)日韓併合成る迄五百年間。

朱子學 支那宋の朱熹の唱へた儒學。

人間の造つた建築が……やはり佛寺の外にはあるまい。

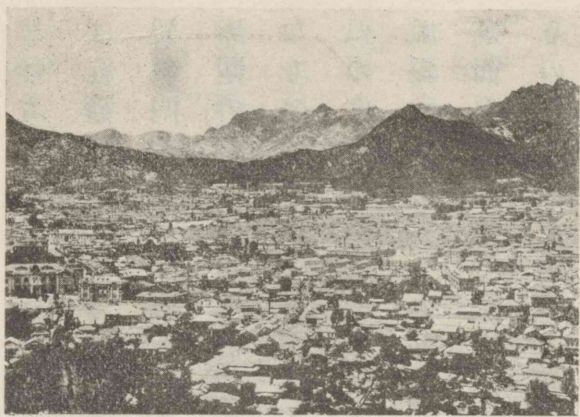
郊外に出て樹木の茂つて居る處は、殆ど皆王陵の所在地だといふことである。京城の近くには李朝の王陵が多い。陵は紅箭門といふちよつと日本の鳥居を思はせる様な赤い木製の門と、丁字閣といふ小さな建物、その後の丸い小丘陵、陵の周圍の石人石馬、墓前の石燈籠や魂魄を招ずる大きな石臺位なもので、別にこれといふことはないが、その陵墓の丘全體の狐の皮の様に黄ばんだ芝生や、石苔を青白くくつつけて黒く風霜にさびた石人石馬の默せる姿は、やはり一つの好ましい畫面を提供する。朝鮮を訪ふ多くの人は誰も金剛山を訪ひ、その岩石美を讚へるが、京城の眞上に聳える北漢山、殊にその最高峯である白雲台附近の雄大な岩石の美しさを忘れるものが多い。白雲台そのものは恰も勇士の鎧つた胸當の如く

*魂魄

「風霜にさびた石人石馬の默せる姿」

金剛山 朝鮮第一の名勝地。江原道北部にある。

「雄大な岩石の美し



京城市街圖

に、空高く京城を壓して立つて居るが、その右には恰も釣鐘の形の様な岩石が聳え立つて、人間を寄せつけぬ威力を示して居る。京城の東南端の樊忠壇に設けられた博文寺の側からは、北漢山に竝んで、道峯、佛岩等の岩山を一目に眺めることが出来る。これは恐らく京城市中に於ける最も勝れた展望であらう。京城の景觀を語るに當つて逸することの出来ないのは漢江である。その河幅の廣く、砂洲の大きく、水量の多いことに於て、内地には多く類を見ないが、京城

「人間を寄せつけぬ威力」
樊忠壇 南山東北麓にある公園。元韓國の招魂場。

*景觀

淀川 琵琶湖に發し大阪市の西方を流れ大阪灣に注ぐ。
隅田川 東京市の東方を貫流して東京灣に注ぐ。

*大味

*と共に

「内地で見られぬ一種のくつろぎを認め得られる」

が大阪や東京の如く商工都市でないせゐもあらう。淀川や隅田川の如くその水が汚く濁らないで、深い山谷の清さを多く保つて居るのが何よりも有難い。京城附近でも漢江の風景には見るべきものが随分多いが、唯内地人の眼には少し大陸的で大味に過ぎる感があるかも知れない。けれども江上を靜かにゆく帆船江邊に鮮かな緑を見せる菜畑、兩岸にかすむ一群の柳の竝樹、悠々として川に迫らぬ丘陵と山岳の色、若しくは所々の渡津に平たい大きい渡し船が、牛と共に牛車、人と共に自動車を積んで、その上に又白衣の人を乗せて向岸へ漕ぎゆく景色などには、内地で見られぬ一種のくつろぎを認め得られるであらう。

(靜夜集)

い子にいろんな事を云つて、警しめたりおどしたりした。自分
分は子供の時に蜂を怒らせて耳たぶを刺され、三七草さんしちくさの葉を
もんですりつけた事を想ひ出した。あの時分はアム
モニア水を塗るといふやうな事は誰も知らなかつたのであ
る。

とにかく、こんな處に蜂の巢があつてはあぶないから落し
てしまはうと思つたが、蜂の居ない時の方が安全だと思つて、
其の日は其の儘にして置いた。

それから四五日はまるで忘れて居たが、或朝、子供等の學校
へ行つた留守に、庭へ下りた序に、思ひ出して覗いて見ると、蜂
は前日と同じやうに、軀を逆様に、巢の下側に取付いて仕事を
して居た。二十位もあらうかと思ふ六角の蜂窩の一つの管

* 警しめる

三七草 菊科に屬す
る多年生草本。支
那原産。藥草の一
種。

アムモニア水 特有
の強き刺激性の臭
氣を有し、強アル
カリ性。無色透明
揮發性の液體。

「あぶないから落し
てしまはうと思つ
た」

「思ひ出して覗いて
見る」

* 蜂窩

六稜 稜はかど、す
み、の意。六角。

に繼ぎたしをして居る最中であつた。六稜柱形の壁の端を
顎でくはへてぐるぐると廻つて行くと、壁は二ミリメートル
位長く延びて行つた。其の新たに延びた部分だけが際立つ
て生々しく見え、上の方の煤けた色とは著しくちがつて居る
のであつた。一廻り壁が繼ぎ足されたと思ふと、蜂は更にし
つかりとからだの構をなほして、そろそろと自分の頭を今造
つた穴の中へ挿入れて行つた。如何にも用心深く、徐々と體
を曲げて、頭の見えなくなる迄挿入れたと思ふと、間もなく引
出した。穴の大きさを確めて、始めて安心したと云つたやう
に見えた。そしてすぐに隣の管に取りかゝつた。

私は此の歳になる迄、蜂の此のやうな舉動を詳しく見た事
がなかつたので、強い好奇心に驅られて見て居る内に、此の小

* 舉動

* 好奇心

さな昆蟲の巧妙な仕事を無慚に破壊しようといふ氣には、どうしてもなれなくなつてしまつた。

それから、時々庭へ下りる度にわざ／＼覗いて見たが、蜂の居ない時は寧ろ稀であつた。見る度に六稜柱の壁は段々に延びて行くやうであつた。

ある時は顎の間に灰色の泡立つた物質を一杯溜めて居る事が眼についた。そして壁を延ばす代りに、穴の中へ頭を挿しこんで内部の仕事をやつて居る事もあつた。しかし、それがどういふ目的で何をして居るのだから、自分には分らなかつた。

其の内に私は何かの仕事にまぎれて、しばらく蜂の事は忘れて居た。多分半月程たつてからと思ふが、或日ふと想ひ出

「巧妙な仕事を無慚に破壊しようといふ氣には、どうしてもなれなくなつてしまつた」

「ふと想ひ出し」

して覗いて見ると、蜂は見えなかつたのみならず、巢の工事は前に見た時と比べて、ちつとも進んで居ないやうであつた。なんだか豫想が外れたといふだけでなしに、一種の極軽い淋しさといつたやうな心持を感じた。

それから後は何時迄たつても、もう蜂の姿は再び見えなかつた。私はどうしたのだらうと、色々な事を想像して見た。

往來で近所の子供にでも捕へられたか、それとも私の知らないやうな自然界の敵に殺されたかとも考へて見た。しかし又此の蜂が今現に何處か遠い處で、知らぬ家の庭の木立に迷つて、あてもなく飛んで居るやうな氣もした。

私は親しい友達などが死んだ後に、獨りで街の中を歩いて居ると、ふと其の友が現に同じ東京の何處かの町を歩いて居

「一種の極軽い淋しさといつたやうな心持を感じた」

*現に

る姿をあり／＼と想像して、云ひ知れぬ淋しさを感ずる事があるが、此の蜂の場合にもこれとよく似た幻を頭に描いた。そして強い眩しい日光の中にきら／＼して飛んで居る蜂の幻影が、妙に淋しいものに思はれて仕方がなかつた。

今日覗いて見ると、蜂の巣のすぐ上には棚蜘蛛が網を張つて、其の上には枯葉や塵埃が一杯にきたなくなつて居る。蜂の巣と云ひながら、やつぱり住む人がなくて荒果てた廢屋のやうな氣がする。此の巣のすぐ向う側に眞紅のカンナの花が咲亂れて居るのが、一層蜂の巣をみじめなものに見せる。私はともかくも此の巣を來年の夏まで此の儘そつとして置かうと思つて居る。來年になつたら、此の古い巣に何事か起りはしないかといふやうな豫感がある。 (冬彦集)

「蜂の幻影が、妙に淋しいものに思はれる」

カンナ

だんどく(曇華)。「眞紅のカンナの花が咲亂れて居るのが、一層蜂の巣をみじめなものに見せる」

「來年になつたら」

一六 蜘蛛の絲

芥川龍之介

或日のこととございます。お釋迦様は、極樂の蓮池のふちをぶら／＼お歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、其の眞中にある金色の藥からは、何とも言へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。極樂は丁度朝でございました。やがてお釋迦様は其の池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽うてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になりました。此の極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つてをりますか

芥川龍之介 文學者。昭和二年歿、年三十六。

お釋迦様 釋迦牟尼佛。

*極樂

「極樂は丁度朝でございました」

*地獄

ら、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色がまるで規眼鏡を見るやうにはつきりと見えるのでございます。

* 三途の河

すると、其の地獄の底に犍陀多と云ふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿がお眼に止りました。

「犍陀多と云ふ男が蠢いてゐる姿」

この犍陀多といふ男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろの悪事を働いた大悪人でございますが、それでもたつた一つ善い事をした覺がございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を擧げて踏殺さうとしましたが、いや、いや、これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無暗にとるといふ事はい

くら何でもかはいさうだ。と、かう急に思ひ返して、とう／＼其の蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、此の犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら此の男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極

「出来るなら此の男を地獄から救ひ出してやらう」

樂の蜘蛛が一匹美しい銀色の絲をかけて居りました。

* 翡翠
「極樂の蜘蛛が一匹美しい銀色の絲をかけて居りました」

お釋迦様は其の蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうしてそれを玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ眞直ぐにお下しなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐた毘陀多でございます。

何しろどちらを見ても眞暗で、たまに其のくら闇からぼんやり浮上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山が光るのでございますから、其の心細さと言つたらございません。其の上あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つて居て、たまに聞えるものと言つては、たゞ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。

これは、此處へ落ちて來る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れ果てて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございました。ですから流石大悪人の毘陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、唯もが

「罪人が吐く微かな溜息ばかり」

*咽ぶ

「死にかゝつた蛙のやうに」

いてばかり居りました。

ところが或時の事でございます。何氣なく毘陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めますと、其のひつそりとした闇の中を、遠い／＼天の上から、銀色の蜘蛛の絲がまるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、する／＼と自分の上へ垂れて參るではございませんか。毘陀多は之を見ると、思はず手を打つて喜びました。此の絲に縋りついて何處までも上つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと極樂へはひる事さへも出來ませう。さうすれば針の山へ追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。

「銀色の蜘蛛の糸が……一筋細く光りながら、する／＼と自分の上へ垂れて參るではございませんか」

「手を打つて喜びました」

かう思ひましたから、健陀多は早速其の蜘蛛の絲を兩手でしつかりと掴みながら、一所懸命に上へくとたぐりのぼり始めました。もとより大悪人のことですから、かういふ事には昔から慣切つて居るのでございます。

併し地獄と極樂との間は何万里となく隔つてゐるもので、すから、いくら焦燥つて見た所で容易に上へは出られません。やゝしばらくのぼる中に、とうとう健陀多もくたびれて、もう一手繰も上の方へは手繰れなくなつて仕舞ひました。そこで仕方がございませぬから、まづ一休み休む積りで、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見おろしました。

すると一所懸命にのぼつて來た甲斐があつて、さつきまで自分が居た血の池は、今ではもう何時の間にか闇の底に隠れて居りました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も、足の下になつてしまひました。此の分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも存外譯がないかも知れませぬ。

*たぐる

「一手繰も上の方へは手繰れなくなつて」

健陀多は兩手を蜘蛛の絲にからみながら、此處へ來てから何年にも出した事のない聲で、「しめた、しめた。」と笑ひました。ところが、ふと氣がつかますと、蜘蛛の絲の下の方には數限りもない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうにやはり上へくと一心に攀ぢのぼつて來るでございませぬか。

「しめた、しめた」と笑ひました」

健陀多は之を見ると、驚いたのと恐しいのとで、暫くは唯馬鹿のやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして居りました。

「馬鹿のやうに大きな口を……」

自分一人でさへ断れさうな此の細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人数の重みに堪へる事が出来ませう。もし萬一途中で断れたと致しましたら、折角此處までのぼつて来た此の肝心な自分までも、もとの地獄へ眞逆様に落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。が、さう云ふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まつ暗な血の池の底から、うよ／＼と這上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながらせつ／＼とのぼつて参ります。今の中にどうかしなければ、絲は眞中から二つに断れて、落ちてしまふに違ひありません。

そこで健陀多は大きな聲を出して、
「こら、罪人ども。此の蜘蛛の絲は俺の物だぞ。お前たちは

「せつ／＼とのぼつて参ります」

一體誰の許を受けてのぼつて来た。下りろ、下りろ。一と喚わめきました。

其の途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に健陀多のぶらさがつてゐる處から、ぷつりと音を立てて断れました。ですから健陀多もたまりません。あつと云ふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくる／＼廻りながら、見る見る中に闇の底へまつさかさまに落ちてしまひました。後には唯極樂の蜘蛛の絲が、きら／＼と細く光りながら、月も星もない空の中途に短く垂れて居るばかりでございます。

三

お釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて健陀多が血の池の底

「下りろ、下りろ」と喚わめきました」

*喚わめく

「ぷつりと音を立てて断れました」

*獨樂のやうに

「闇の底へまつさかさまに落ちてしまひました」

へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶら／＼とお歩きになり始めました。

自分ばかり地獄から抜け出さうとする犍陀多の無慈悲な心が、そして其の心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦様のお目から見ると、あさましく思召されたのでございませう。

併し極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着いたしません。其の玉のやうな白い花は、お釋迦様のおみ足のまはり、ゆら／＼と夢を動かしてをります。其のたんびに、真中にある金色の薬からは、何とも言へない好い匂が絶間なくあたりに溢れ出ます。

極樂ももうお午に近くなりました。

(傀儡師)

「悲しさうなお顔」

*あさまし

*たんび

「極樂ももうお午に近くなりました」

一七 湘南雜筆

徳富 蘆花

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。

障子を開き、簾を下して坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す。富士も夏衣を着けぬ。碧の衣すが／＼しく、頭には僅かに二三條の雪を冠れり。青疊敷く相模灘の上を、習々として渡り來る風の涼しきを聞かずや。

今日初めて蝸の聲を後山に聞きぬ。一聲さわやかにして、銀鈴を振れるが如し。

白日、山に入り、涼は夕と共に生ず。外に出づれば、川に釣る人あり、談笑の聲あり、花火を揚ぐる子供あり。夏の季節は始

徳富蘆花 名は健次郎。文學者。昭和二年歿、年六十。

湘南 相模の海岸地方、即ち、逗子・鎌倉・大磯邊をさす。「簾外山青く、白衣の人往來す」

*着けぬ

*冠れり

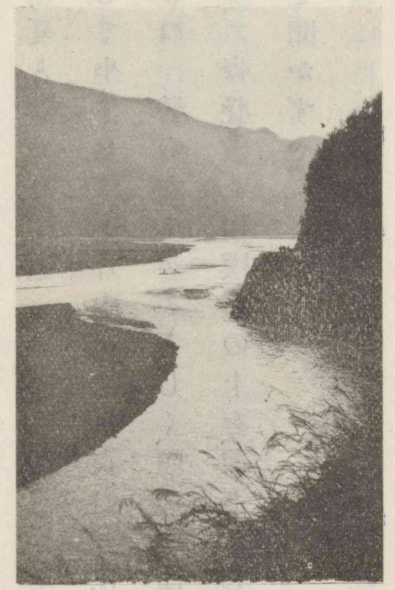
*習々

相模灘 相模の三浦半島及び伊豆半島に擁せられた海灣。*聞かずや

*白日

「夏の季節は始まりぬ」

まりぬ。日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。前に残照流るゝ川あり、後に青蘆さやくと戦げり。潮次第に満ち、川逆さまに流れぬ。水澄みて水無きが如く、水底地よりも鮮かなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生まれのかいづは隊をなして、玉にも似たる水を遊げば、其の影ちらちらと底に印せり。石垣の穴より出で遊ぶだば鰻は、螯をあげて迫り来る辨慶蟹



川、る流照残

* 残照
「川逆さまに流れぬ」

かいづ 魚の名。黒鯛の小さきもの。
「其の影ちらちらと底に印せり」
だば鰻 「ちちかぶり」ともいふ。カヅ

を避けて身をかはせば、小蝦は杭を抱きて這登り、石垣に縋れる宿かりは、身を投ぐる様にころ／＼と水底におち行く。下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より、涼風と共に流れ来る。潮満ち盛れば、夕陽明滅す亂流の中。残照の影や、もすれば押流されんとし、小鮮群りて水を攪すれば、水流れて其の紋を消し、甍々たる川底の藻は水に梳られて、今にも流れ出でんとすれば、幾隊の魚苗も止まりかねて流れ行く。垂れたる足の爪先に水とゞく頃は、残照消え、潮も満ちて淀みぬ。鱧跳つてまた水に落つる音、石を投ぐるやうなり。

(自然と人生)

カに似て小さい。辨慶蟹 十脚目、俯額族に屬する。背中のほゞ四角形の中型蟹の一種。
* 杭 宿かり 蟹の類。
「夕陽明滅す亂流の中」

* 小鮮
* 流れ出でん
* 魚苗

* 爪先 鱧 鱧。硬鱈類中ホラ科に屬する魚。
「石を投ぐるやうなり」

八 朝の庭

高 濱 虚 子

高濱虚子 名は清。俳人。明治七年生。

萩の若葉の心のところに油蟲がついて居る。又それに蟻が群つて居る。よく見ると、油蟲は時々痙攣を發したやうに動いて居る。蟻は其の上を無造作に這うて居る。これは結局どちらの勝に歸するのであらう。萩は一體己をどうする積りだと言つたやうに、痒さうに首筋をもたげてじつとして居る。

*勝に歸する

*痙攣

其の萩の下に蟻が塔を作りつゝある。梅雨が大地をぼこぼこと柔かくして居る、其の土を山のやうに積みあげて居る。何匹とも數知れぬ蟻が其の山の上を右往左往さまようて居る。五六匹の蟻が頭を突合はして何か談合してゐる様子で

「塔」

*右往左往

あつたのが慌しく連れだつて巢の中に這入る。また連れだつて巢の中から出て來る。

何處やらに蠅の唸る聲が聞える。

「蠅の唸る聲」

庭の芝生に菌が生えて居る。毎年梅雨の頃には、此の菌が生える。白い小さい菌で、一所に十ばかりもかたまつて生えて居る。又芝生には小さい草花が生えて居る。それは斯うやつて芝生にしがんで居ると始めて目に入るやうな小さい花である。小さい莖の尖に白い小さい苔が咲いて居る。小さいと言へば、芝の尖の一つ／＼宿つて居る露は馬鹿に小さい。裳や下駄を濡らすのは此の露だ。それよりも愈、小さいのは菌の傘の端に宿つてゐる露だ。傘の端がぎざ／＼になつてゐる其の一つ／＼の尖にある露だ。

「白い小さい菌」

「白い小さい苔」

「露」

白い蝶が三匹もつれて松の樹の向うに飛んで居る。

睡蓮の苔が少し締りをゆるめてゐる。

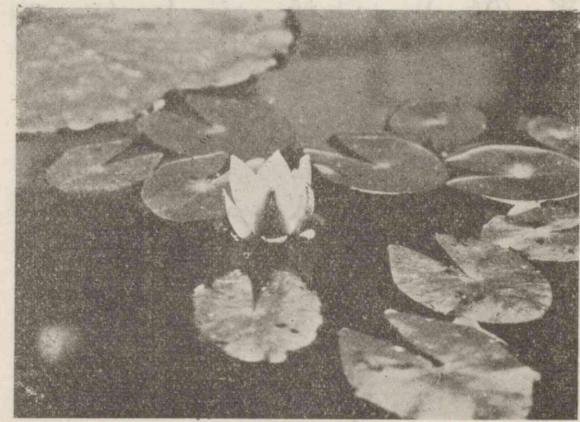
一番電車が通る。

雨氣が直ぐ近くの山の上を追つて居る。隣の庭の松の樹をも

霧が包んで居る。

芝生に様々の蟲がゐるのに氣がつく。其の中に小さい「ばつた」が居る。これは赤ん坊の「ばつた」

であらう。私の下駄の影を見て逃げまどふ。他に芝にしがみついて居る一匹の蠅が目にとまる。これは今やつと生ま



睡 蓮

「白い蝶」

「睡蓮の苔」

「一番電車」

「霧」

「ばつた」 關東地方にいていなこ類の總稱。

「蠅」

れ出た儘であらう。羽が極めて綺麗で、全體が薄紫色をして居る。それに二つの黒い眼が馬鹿に大きい。

蝶が殖えた。七八匹も松の樹の間を飛んで居る。一匹は私の背中あたりに飛ぶ。

睡蓮の苔を覗き込む。芭蕉の雫が襟元に落ちる。熱帯の

病を此の雫が持つて來たやうな心持がして、ぞつとする。睡蓮の苔は少し口を開けかけて居る。其の中に黄色い蕊がほ

のめいて見える。青梅が三つ圓らになつて居るのが目立つ。

其の他にもなつてゐるのであらうが、青葉がくれに見えぬ。

二番電車が通る。(朝の庭)

「蝶が殖えた」

「芭蕉の雫」

「黄色い蕊がほのめいて見える」

「青梅が三つ」 *圓らに

「二番電車」

一九 蟻

坂本 四方 太

坂本四方太 子規門下の俳人。大正六年歿、年四十五。

夕立は今しがた霽れて、處々に綿のやうなちぎれ雲が浮いて居る。庭におりて、見るともなしに立つて居る中、ふと蟻の穴に目が著いた。

暫くしやがんで見て居ると、今は雨後の修繕と見えて、どの穴でも、工夫が頻りに土くれを外に運び出して居る。工夫は身長五分許りの大蟻で、土くれをくはへて出ては適宜の處に投げて歸る。一つの穴に十匹ぐらゐ働いて居るので、此の時はや幾らかの蟻塚ちりづかの形が出来た。蟻塚といふのは、彼等の頭より遙かに大きく、さうして重い土くれの集りで、取りも直さず、工夫の油汗を流して持出したものである。

*霽れて

「雨後の修繕」

*油汗を流す

何かくれてやるものは無いかと思つて、そこらを見廻すと、後の菊の葉に大きな蠅が止つて居る。ぬき足さし足近寄つて、手をさし伸べて捕らうとすると、蠅はふういと飛去つた。しくじつたと思ひながら息を凝らして窺ふと、今度は前よりも一層要害な葉の上に止つて、「こゝまでお出で」といつた様に、尻を天にむけて身構へた。さうして兩手を揉んで頻りに頭を撫でて見せる。「己れ憎い奴め。」と思つたが、前の失敗に懲りて、今度は警戒に警戒を加へて、じり／＼と詰寄つた。こちらの武器は只爪一つなので、満身の力を爪先にこめて、ぴちんと弾くと、手答があつて、髓に命中した。

蠅は三尺先の大地に、のけぞり返つてもがいて居る。早速蟻になげてやると、さあ大變だ。蟻が出て來て引張り込まう。

*ぬき足さし足

*息を凝らす

*要害

「こちらの武器は只爪一つ」

*命中

*のけぞり返る

とする。蠅は片足踏張つて引かれまいとする。いよゝゝ、蠅と蟻との相撲が始まつた。したゝか争つて居る中、蠅は痛手に疲れ、とうゝ穴に引張り込まれた。まづこれで安心と思つて居ると、蠅の頭がにゆうつと出て來たのには驚いた。其の内、力も盡きたと見えて、再び引張り込まれた。今度は幾ら待つて居ても出て來ない。蠅は實に死力を出して争つたのである。蠅とはいへ、あつばれな最期であつた。

自分は餘りの面白さにもつと蠅は居ないかとあちらこちら探した。「菊畑には人殺し、否蠅殺しがあつた。」といふ噂でも立つたのか、今度は蠅の影さへも見えない。せんかたなく、臺所にいつて飯粒と麩の切れとを取出して、其れを蟻の穴の口においた。すると一時は蟻も驚いた様に、二三匹づつ寄つ

*したゝか

「死力を出して争つたのである」

て來て、上つたり下つたりして居たが、しまひには、鼻突合はせて、精進はいやだね。今少しひまな時ならまだしもだが、人間の氣が利かないのにも困つてしまふ」といふ様な風で、もう見向きもしない。例の開鑿に熱すると、天から降つたか地か

*精進

*開鑿
「天から降つたか地から……眞黒に集つた」

ら涌いたか、數千の蟻が知らぬ間に庭の彼方に眞黒に集つた。其の擴りは凡そ直径二尺許りの圓形をなして居る。やがてこの群が運動を始めて、自分が先程まで見て居た蟻塚に近づいたと思ふと、數十の蟻が矢庭に蟻塚に突入した。他の蟻も我もゝとそこに向つて走つた。まるで軍隊の突貫と同じだ。殆どみんな這入つて了つて残り僅かに十四五匹となつた頃に、先登の蟻が白い繭の様な形をした卵をくはへて駆出して來た。續いて二匹、三匹と駆出して、それから後は出る

*突貫

とも出るとも、潮の寄せるが如くに出て来た。てんでに白い卵を持つて居るからをかしい。運動會の提灯競走はこんなに人数が多くない。祝賀會の球燈行列はこんなに活潑でない。實に庭内の一大奇観である。

先登ははや庭を横ぎつて、隣の庭の草叢を踏越え、くゞり抜けて行く。皆々續いて行く。どこまで行くかと首を伸ばして見て居ると、隣の庭を横ぎつて、遙か彼方の胡瓜畑の方に行つた。折柄座敷の時計が四時を打つた。此の掠奪は僅か四五分間に終つたのである。蟻塚はひどく荒されて、工夫等は何處に行つたか、終に一匹も見えなくなつてしまつた。

(ホトトギス)

「庭内の一大奇観」

「胡瓜畑の方」

* 掠奪



寂しき香
(岳ヶ嶺)

二〇 寂しい音

窪田 空穂

休んでゐる間は互に健康を氣にしあつて、疲れたとか、眠れ
たとか眠れなかつたとかを問題としたが、歩き出すと、全くさ
うしたことは口にしなくなつた。して見たからとて、倒れて
動けなくなるまでは、歩き續ける外はないのである。それに、
私の氣分のさわやかさと、冒険に向つて進む心とは、自然にさ
うしたことを忘れさせもした。
山上の午前は概して雲が無いといふが、その日は殊に無か
つた。明け方だけは概して見られるといふ雲海さへも見ら
れないほどに無かつた。私たちの眼には、空と山の峯との、い
ひ難い静けさをもつて静かに輝きながら相對してゐるのが、

窪田空穂 名は通治。
歌人。早稻田大學
教授。明治十年生。

「氣分のさわやか
さ、冒険に向つて
進む心」

「静かに輝きながら
相對してゐるのが」

視力の及ぶ限りは、明かに見えるのであつた。「この踏んである足の下は一萬尺の高處だ。」さう心に思ふと、まさしくもそのことが描かれて来る。そして異常なところにある時の心の緊張を感じて来る。だが、したたく眼に見てゐる周囲は、私たちのあるところよりも一段と高いので、それは單なる思想として、すぐに心から消えていつた。南に向つて進んで行く一行の東に當つて、餓鬼・燕がその暗緑の峯を空に擡げてゐる。やゝ遠く大天井が見えてゐる。西には近く赤牛がその腹這つた背をうね／＼と續けて、やゝ遠く薬師がその一面を見せてゐる。そして私たちの足もとには、岩の偃松はひまつが縁に這つてゐて、ところ／＼に眞白な高山植物の花が咲いてゐるのである。靜かに踏む岩の一つ／＼は、大きく、頼

「一萬尺の高處だ」

「異常なところにある時の心の緊張」

餓鬼・燕・大天井・赤牛・薬師 日本アルプス山系中の山の名。

「大きく、頼もしく、

もしくは、そして傾斜もゆるやかである。

そして傾斜もゆるやかである」

「道が附いてゐるのかね。」縦走者の迎る道は、自然に附いてゐるのかも知れないといふ氣がして折柄一緒に歩いてゐた案内者に聞いた。

「尾根へ絡んで行くのです。」案内者は笑顔になつて、きまつきつたことを子供に訊かれた大人のやうな口調で云つた。

「尾根へ絡んで行くのです」

* 口調
* 絡む

尾根に絡む。私はその言葉の意味を辿つた。道は無いらなく、尾根に、即ち頂上を貫いてゐる線に離れないやうにして、離れなくて、はならない時には離れもするが、大體としては添ふやうにして行く、さういふことだらうと察した。道は無いのだと知つた。そして「絡む。」うまい表現をするものだと思ひを感じた。

「うまい表現」

道は樂ではあつたが、併しすぐに暑くなつて來た。昨日の經驗で、上着は歩き出す時から人夫に預けたが、暫くの間はさすがに寒かつた。それが間もなく暑くなつて、たゞ一枚の夏



本日アルプス地圖

を見るやうな感じを起した。

「三ツ嶽です。」と、地圖を見たY君は教へてくれた。そして

シャツがまた汗に濕り出すのを感じた。

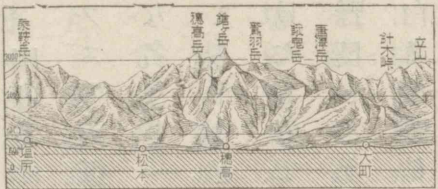
私たちの前には、可愛い丘があらはれて來た。圓い丘と、岩を綴つてゐる偃松とが、距離の關係から全景となつて眼に入つて來たときには、大きな築山

「可愛い丘」

「距離の關係から全景となつて眼に入つて來た」

笑ひながら、一萬尺に近いんですよ。」

私は笑つた。冗談のやうに聞えたからである。



日本アルプス標高圖

三ツ嶽の上に立つて前方を見ると、やゝ遠く一つの山を見た。それは、大きさはこの山に較べられる程度のものであるが、眞白な色をした山である。落ちついた、安らかな感じを持つてもゐた。山の頂に、大きな岩の三つ四つが、一かたまりになつて立つてゐるのも、はつきりと見えた。其の山には、遠く見ると、雲の影の落ちたのかと思はれる例の偃松の盡きる限はなかつた。

「はつきりと見えた」

「雲の影」

野口五郎 日本アルプス山系中の山の名。

「五郎です。野口五郎です。」とY君はいつた。

野口五郎といふ名は、その名の奇抜なところから、私の記憶にもあつた。それは私たちの越すべき山であることも知つてゐた。

山の名はいづ誰が附けたのかは知らないが、この日本アルプスの大抵の山の名は、人間生活に直接なものが多く、知識的な名など一つもない。多分は獵師などがその形から聯想して、ちやうど若い學生が他人に綽名を附けるやうな心から附けたものであらうと思はれた。それにしても五郎は、黒部も、野口も、どういふところから思ひ寄せたのであらうと、軽い面白さを感じた。

三ツ嶽から野口五郎まではかなりの道のりがあつた。いづか私はY君と二人になつて歩いてゐた。

道は崩れの上に出た。山と山との鞍部は、今その一半を切取られて、深い谷はすぐに崖となつてゐるのであつた。そこには偃松があつて、崖の上の私たちの歩いて行くべきところを蔽つてゐる。私たちは足もとに深い崖を見下しながら、足場の定まらない偃松の上を涉つて行くのであつた。

遠く微かに、夢を思ひ出すやうな、ほのかな瀨の音が耳に入つて來た。その音はあたりの無聲を今更のやうに心附かせた。私は耳を澄まして、その音の起るところを知らうとした。水の音だと、それは私たちの足の下に開けてゐる谷間より外にはある筈がない。私は谷間を見下した。谷に満ちてゐる明かるい靜かな光線は、遠い底までも見せた。併し私の眼は、あれば見える筈の谷川の白いきらめきを認めることが出來

* 奇抜

* 聯想

「綽名を附けるやうな心」

「夢を思ひ出すやうな、ほのかな瀨の音」

なかつた。

「何處から来る音だらう？」私はY君にさういつた。いひつゝも、微かな音といふよりも、寧ろ無聲の境に響く、寂しい、心惹かれる音に耳を澄ましてゐた。

Y君も耳を澄ましてゐたが、「何處から来る音だらう？」といつた。「偃松の中からですよ。」といつた。

さういはれて私は偃松に耳を集めた。崖に沿つて這つてゐる偃松の中に、まさしく其の音はあつた。併しそこには風は無かつた。搖ぎ易い松の葉の一片さへ搖いではゐないのであつた。それでゐて、そこには音があるのであつた。微かな、極めて微かな、風といふよりは空氣の流といふ方が適當なものがあつて、その偃松の繁つた葉の中を通りつゝ、その葉に

「無聲の境に響く、寂しい、心惹かれる音」

「空氣の流」

よつて起す音なのであつた。

「寂しい音だね。」

私はさういつて、更にあたりを見た。日光は明かるく靜かに、岩山を、谷を照らして、偃松は無聲を展べてゐる。寂しい音は無聲そのものの息のやうに、絶える時の無い息で、今も續いて聞えて来る。

（日本アルプス縦走記）

「寂しい音だね」

「無聲そのものの息のやうに……續いて聞え」

じつと大きな山を眺めてゐると、いつとなしに、またわけもなしに、心がどつしりと落ちついて来る。山の與へる安定の感じはまことに貴い。「山は靜かにして性をやしなふ。」と芭蕉も云つて居る。これはくづれるといふことが極限まで達したものの形の與へる安らかさの感じである。

（相馬御風）

相馬御風 名は昌治。文學者。明治十六年生。

二一蚊

新井白石

わが父致仕の後、事にふれて宣ひたりしには、蘆澤といひしものは、幼き時に父におくれしを、其の父の遺領賜うて近く召使はれしに、それが二十歳ばかりに及びし比に、我を召す事ありて参りしに、戸部は物に腰かけて、打刀を横たへておはします。其の氣色常にかはりぬと思ひしに、『近くまゐれ。』とありしかば、腰刀をとりて参らんとせしに、『そのまゝにて参れ。』とありしによりて、近く参りしに、『たゞ今蘆澤を召出して手づから誅すべし。それにさぶらふべし。』と宣ひ出したり。答へ申すこともなくてありしに、やゝありて、『いらへ申す事もなきは、思ふ所やある。』と仰せられしほどに、『さん候、かれが常々申

新井白石 名は君

美。將軍徳川家宣の侍講。享保十年(三六)歿、年六十九。

わが父 正濟。久留里侯土屋利直に仕ふ。その先新田氏に出づ。

*致仕 賜うて

戸部 コブ。民部省の唐名。久留里侯土屋利直をその官名によりて呼びしもの。

*打刀 *腰刀

「答へ申すこともなく」 「やゝありて」

し候ひしは、いとけなき時に父におくれし身の、莫大の主恩によりてかくまで生長しぬ。此の恩に報いまゐらせぬこと、世の常の人々の如くしては協ふべからずと申す。天性不敵なるもの、しかも年なほ若くして、をこの振舞も、多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候ひぬらん。但し若く候時に彼が如くなるものにあらずしては、年たけ候ひし後に、物の用には立たぬもの、多く候はんか。これらの事を存じめぐらし候につきて、御答の遅く候ひしは、恐れ思ふ所に候。』と申す。又のたまひ出す事もなく、我も亦申す事もなくしてさぶらふほどに、やゝありて、面に蚊の集りぬるに、『逐ふべし。』とのたまひしほどに、顔を動かしければ、血に飽きて胡頹子の如くになりし蚊の、六つ七つはらくと地に墜ちしを、懷の紙をとり出して、

*莫大

*協ふ

*をこの振舞

「又のたまひ出す事もなく、我も亦申す事もなくしてさぶらふ」 「やゝありて」

胡頹子 熱帯産の植物。胡頹子科に属する植物の總稱。高さ約二米。

つゝみて袖にしてさぶらふ。又やゝありて、「罷り歸りて休み候へ。」とのたまひしかば、退出す。かの男は常に酒を好みて酔ひ亂れゐる事どもありしかば、關といひし人のそれに親しかりしを語らひて、二人して、まづ酒を断たしめて常に諫めし事ども怠らず。かくて年月経し後に、つひに父の職をも仰せ蒙りたりき。今は戸部もうせ給ひぬれど、はじめ我が申せしことばの空しからざるやうに仕へまゐらせよと思ふなり。」と宣ひたりき。これは、かの久しくして、また酌酒くじゆの事ありしが故なり。

(折たく柴の記)

蒼顔鐵ノ如ク鬢銀ノ如シ。紫石稜々電人ヲ射ル。

五尺ノ小身渾テ是レ膽。明時何ゾ用ヒン麒麟ニ畫カル、ヲ。

(新井白石)

「又やゝありて」

「申せしことばの空しからざるやうに」

* 酌酒

折たく柴の記三卷。新井白石の隨筆。父祖の事及び自己の經歷を平易なる和漢混淆文にて記せるもの。

三 難 破 船

或日、英國リバプールの港から一隻の大きい汽船が出帆した。船には六十人の船員を合はせて二百人許りが乗込んで居た。船長も船員も多く英人であつた。乗客の中には伊太利人も幾人か居た。汽船はマルタ島に行くのであつた。空模様は悪かつた。

三等客の中に十三歳になる伊太利少年が居た。年の割には身體は小さいが、美しい、元氣らしい、引きしまつた顔の少年であつた。前檣の側に一人、捲いた綱の上に腰かけて、古びた革囊を傍に置いて、その上に手をかけて居た。顔は褐色をしてゐて、黒い波打つた髪が肩の所まで垂れて居た。粗末な服

リバプール 英國イ

ンケランド西部の港。ロンドンを距ること西南約三三〇軒。

マルタ 地中海の中

央にある島。シシリ島の中部、英國地中海艦隊の根據地。

「空模様は悪かつた」伊太利少年。

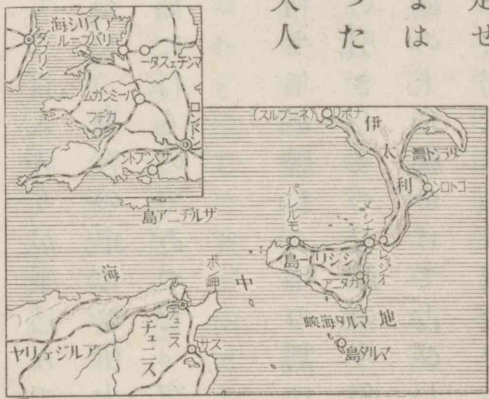
* 革囊

に破れた外套を着て、帯皮には古い小さい鞆をつけて居た。物思はしげに、あたりの乗客や、船や、走せ過ぎてゆく水夫や、騒がしい海を見まはして居た。何か大きな不幸でもあつたのか、顔は子供らしいけれど、表情は大人のやうであつた。

出帆後間もなく、伊太利から出た一人の水夫が、小さい女の子の手を引いて少年の前に来て、

「マリオ、こゝによい道連れがあるよ、」

と、いひおいて行つてしまつた。女の子は少年の側に腰をかけた。彼等は互に顔見合はせた、



「女の子」

「何處へ行くの？」

「マルタ島へ行つて、それからネーアルスへ行くの。お父さんやお母さんが待つて居るから、逢ひに行くのよ。私の名はギウリエタ、ハギアニつていふの。」

男の子は何もいはなかつた。暫く経つて、彼は革囊の中から麵包と果物とを取出した。女の子は、ビスケットを持つて居た。二人は食べはじめた。先の伊太利水夫があわたゞしくその前を通つて、

「おい見る、あやしくなつて来たぞ！」

と、叫んだ。風はだん／＼はげしく、船はいよ／＼揺れて来た。けれども、二人の子供は船に酔はないで平氣で居た。女の子は笑つて居た。彼女は少年と同じ年頃であつたが、丈がずつ

ネーアルス イタリヤ西部の都會。(ナポリ)

「風はだん／＼はげしく、船はいよ／＼揺れて来た」

と高く、色がやはり褐色で、身體はしなやかで、いくらか病身らしかった。二人の子供は物を食べながら、身の上を語りあつた。男の子は父も母もない。父親は職人であつたが、數日前に、リバプールで彼を一人残して死んだ。それで伊太利領事が世話して、故郷のパレルモに歸るやうにしてくれた。そこには遠い親類がゐるのである。女の子は前年ロンドンの叔母の所へ連れて行かれたのだ。彼女の兩親は貧しかつたため、暫く叔母に預けたので、叔母が死んだら遺産の分配に預らせようといふ積りであつた。所が、數月前その叔母が馬車にひかれて、俄に死んだ。叔母は一文も後に残さなかつた。そこでこの子も、領事に頼んで伊太利に歸るやうにして貰つたので、兩人ともさきの伊太利水夫に託せられたのであつた。

*領事

パレルモ シシリ島の都會。

女の子が、

「それで、私の父さんや母さんは、私が金をもつて歸るのだと思つて居るけれど、違ふのよ。私はちつともお金もたないの。けれども、やつぱり私を可愛がつて下さるんでせう。兄弟もさうなのよ。私には兄弟が四人あるのよ。皆小さいの。私、家で一番大きいの。私が皆に着物を著せてやるの。私が歸つたら、きつと皆喜ぶよ。飛んで來るだらうと思ふのよ。——海があんなに荒れてゐる！」

「海があんなに荒れてゐる」

「あなた、その親類の家に行くの？」

「さうよ、置いてくれさへすれば、」

「置いてくれさへすれば」

「あなたを可愛がつてくれないの？」

「どうだか分らない。」

「私、今年のクリスマスで、丁度十三になるのよ。」

二人は海の事やら、船に乗つてゐる人の事などを話し合つた。二人は終日一緒に居て、時々語をかはして居た。他の乗客は、彼等を姉弟と思つて居た。女の子は靴下を編んで居る。男の子は考へに沈んで居た。海はだん／＼と荒れまさつて來た。夜になつて、二人は別れる時、女の子はマリオに向つて、

「よく御休み！」といつた。

「今夜は誰だつてよくは休めないよ。」

と、伊太利水夫が、折からそこを駆過ぎながら言つた。男の子が女の子に「御休み」と言はうとした時、思ひがけぬ波がはげしく打つて來て、彼を投げ倒した。

クリスマス キリストの降誕を祝するための祭。十二月二十五日の夜これを行ふ。

「海はだん／＼と荒れまさつて來た。」

「思ひがけぬ波が……」

女の子は少年の方へ飛んで行つて、

「おや、あなた、血が出てるのよ。」

乗客は皆下へ逃げようとして居たので、氣をとめる者もなかつた。女の子は、目をまはして居るマリオの側に膝をついて、額の血を拭ひとつて、自分の頭にある赤い頭巾をとつて、それで男の子の頭に繻帶をした。そしてそれを結ぶ時に、男の子の頭を自分の胸に押當てた。それがために帯の上の上衣の黄いろい所に血が一滴にじんだ。マリオは身をふるはして立上つた。

「マリオは身をふるはして立上つた。」

「少しはよいの？」

と、女の子が問うた。

「もう何ともない。」

と、マリオは答へた。

「よく御休み。」

と、女の子がいふ。

「お休み。」

と、マリオが答へた。そして二人は各、自分の室に下りて行つた。

水夫の豫言はあたつた。二人の子供がまだ眠らぬ中に、怖い暴風雨がやつてきた。さながら奔馬の襲ひ来るやうであつた。見るまに一本の檣は折られた。三艘の短艇はさらはれて行つた。舳に居た四頭の牝牛は、木の葉の飛散るやうに影もなくなつて仕舞つた。船の中には大混亂が起つた。恐怖喧囂。嵐のやうな悲鳴、叫び聲、祈りの聲、身の毛もよだつ

「水夫の豫言は」

許りであつた。終夜暴風は烈しくなるばかり。夜があけても少しも衰へなかつた。山のやうな波が横から打つて来て、甲板の上に碎けて、そこらにあるものを、碎いて、割いて、海の中に浚ひこんでしまふ。機關を覆うて居る臺が毀れたので、水が恐しいうなりをして、はひつて來た。火が消えてしまつた。機關士が逃げてしまつた。大きい烈しい潮の流が、此處にも彼處にも押しよせてくる。その時、雷の如き船長の聲が響き渡つた。

「ポンプに懸れ。」

船員はポンプの方に走つて行つた。けれども、この時又海が一荒れ荒れて、凄まじい波が艦の方から打つて來て、船縁をも船口をも打破つて、洪水のやうに潮がはひつて來た。

「ポンプに懸れ」

* 船縁

* 船口

乗客は生きてゐる心地もしないで、客室に逃げてしまつた。そこへ船長が出て來ると、一同は聲を揃へて叫んだ。

「船長！ 船長！ どうしたのでせう。何處に來てゐるのでせう！ 助かりませうか！ 助けて下さい！」

船長は一同の黙するのを待つて、冷靜に言つた。

「もう諦めませう。」

一人の女が神の救ひを叫んだ。外には一人の聲を發する者もなかつた。恐怖が彼等を固くして仕舞つた。暫くの間墓のやうな静けさがつゞいた。乗客は互に蒼ざめた顔を見かはした。海はやはり暴れ狂つてゐる。船は高く低く揺れる。船長は救助艇を下させた。五人の水夫が乗込んだ。救助艇は沈んだ。水夫の内二人は溺れた。その中に彼の伊太

「海はやはり暴れ狂
（しるる）」

利人もゐた。残りの三人は、辛うじて綱に取りついて上つて來た。

「二時間の後には」

これで船員どもも氣を落して仕舞つた。二時間の後には、船は荷積口の所まで水に沈んでゐた。

慘ましい光景がこの時甲板上に出現した。母親達は絶望の中に、我が子を胸に抱きしめた。友人どもは互に抱合つて別を告げた。海を見ないで死なうと言ふので、室に下りて行つた人もある。一人はピストルで自分の頭をうちぬいて、階段から眞逆様に落ちて、そこで死んだ。多くの人々は狂ほしく互に取付き合つて居る。女どもは恐しい痙攣を起して悶えて居る。泣く聲、うなる聲、何とも知れぬ鋭い叫び聲が、一緒になつて聞えて來る。彼處此處には、失神して石像の様に、光

*悶える

のない眼を廣く見開いて、じつと立つてゐる。顔はまるで死んだ者のやうである。ギウリエタとマリオとの二人は、一本の檣に取りついて、瞬きもせず海を見つめて居た。

「二人は、一本の檣に取りついて」

海は少し静まつた。けれども船はだん／＼と沈む。

「長救助艇を下せ。」

と、船長が叫んだ。

たゞ一艘残つてゐた救助艇が下された。十四人の水夫と三人の乗客とがそれに乗つた。

船長は本船に残つて居た。

「一緒に乗つて下さい。」

と、下から水夫が呼んだ。

「おれは、おれの立場に斃れるのだ。」

と船長は答へた。

「他の船に助けられるかも知れませんが、お乗りなさい。」

「あ、お乗り下さい。」

と、水夫どもが重ねて言つた。

「おれは残るのだ。」

「おれは残るのだ」

水夫どもは他の乗客に向つて、

「もう一人乗れる！」女がよい！」

「もう一人乗れる」

一人の女が船長に助けられて前に進んだ。けれども、ボートがあまりに離れてつてあるのを見て、飛下りる勇氣がなく、甲板の上に倒れてしまつた。外の女は皆失神して、死んだも同様である。

「子供をくれ。」

と、水夫が叫ぶ。

この聲を聞きつけて、その時まで化石のやうになつてゐた例の少年とその伴侶^{さか}とが、俄に生きのびたいといふ烈しい本能に覺まされて、同時に檣を離れて船側に飛んでいつた。

「私を！」

と、野獸の如く互に押しよせ合つて、聲をそろへて叫んだ。

「小さい方を！ ボートは一杯になつてゐる。小さい方を！」

と、水夫が叫んだ。

この言葉を聞いて、女の子は電光に打たれた様に腕を垂れた。そして光のない眼にマリオを見つめて突立つた。

マリオはしばらく彼女を見て居た。彼女の胸の血の痕に目がついた。神々しい心の光が電のやうにその顔にひらめ

「私を！」

*化石

*本能

「神々しい心の光」

いた。

「小さい方を！ もう行くよ！」

と、水夫がせきたてる。

その時マリオは、我が聲とも思はれぬ聲を出して、

「あなたの方が軽い。あなたです！ ギウリエタ！ あなた

たには両親がある。私は一人だ。あなたに譲る。下りなさい。」

といつた。

「その子を投げてくれ。」

と水夫がいふ。マリオはギウリエタを抱いて海に投げた。

ギウリエタは、あつと叫んだかと思ふと、水が四方にばつと散つた。一人の水夫が、その腕を取つて救助艇の中に引上げた。

マリオは船側に立つてゐた。頭を高く舉げて、髪は風に波
だたせて居た。平靜に、崇高に！
本船が沈む時、渦巻がひき起された。救助艇は辛うじてそ
れを避けることが出来た。

その時まで、女の子は感覺を
失つたやうにしてゐたが、マリ
オの方を見上げると、涙が迸つ
た。

「さやうなら、マリオさん！」

と、烈しく泣きながら、兩手を彼の方に擴げて叫んだ。

「さやうなら！ さやうなら！」

少年は、手を高く舉げて、



船 破 難

「平靜に、崇高に」

* 感覺

* 迸る

「さやうなら」

と答へた。

救助艇は荒だつ波を横ぎつて、暗い空の下を急いで行つた。
本船に残れるものは、もはや一人も聲を立てるものはなかつ
た。水はもう甲板の端を嘗めて居た。

マリオは俄に跪いた。手を合はせ、目を天の方に注いだ。
女の子は面を覆うた。
彼の女が再び頭を上げて、海の上に視線をなげた時には、船
はもう見えなかつた。

(三浦修吾譯「愛の學校」による)

徳は人を愛するよりも大なるはなく、物をそこなふよ
りも不善なるはなし

(伊藤仁齋)

伊藤仁齋 名は維楨、

字は源佐。儒者。

寶永二年(三六五)歿、
年七十九。

三 知行合一

南條 文雄

豊前の山國谷に正行寺といふ眞宗の寺がある。住職大含は雲華と號し、文學を好み、書畫を能くし、廣く文人墨客と交り、別して頼山陽とは無二の親友であつた。山陽は三十九の年に九州を遊歴したが、山國谷の景勝を探つたのは雲華上人の手引であつた。山陽が「耶馬溪山天下無」と激賞してから、山國谷は耶馬溪として天下に著聞するに至つたのである。

當時、肥後國八代の光徳寺に易行院法海といふ、學徳共に高い眞宗の僧があつた。山陽は遊歴の途次、豫て雲華上人より得た紹介を以て、遙々と法海師を尋ね行き、頼久太郎、老師の高名を慕うてお尋ね申した。お取次をお願ひ申す」と申し入

南條文雄 佛教學者、文學博士。昭和二年歿、年七十九。

山國谷 大分縣下毛郡。

大含 畫僧。嘉永三年(五〇)歿、年七十八。

頼山陽 名は襄、通稱久太郎。儒者、歴史家。天保三年(二九)歿、年五十三。

* 文人・墨客

* 著聞

八代 熊本縣八代郡八代町。

法海 眞宗の僧。號は橋州。肥後の人。天保五年(二九)歿、年六十七。

れた。折柄机の前に端坐して讀經してゐた老師は、やをら起つて、山陽に面會した。山陽は初見の挨拶をすませてから、自分の書いた「楠公傳」の稿本をその懐から取出した。そして慇懃に「老師の御批評を。」と言つた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、手に取らうともしなかつた。さうして、靜かに口を切つた。

「この頃噂に聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふもの、京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間たゞの一度も歸省して親の安否を尋ねようともせず、そして忠臣楠公の傳を作つたといふことだが、では御邊の事でござつたか。」この時、法海師の鋭い眼光は山陽の面上を電のやうに射た。山陽は我知らず面を伏せた。法海師は更に語を繼いで「忠臣は必ず孝子

* やをら

* 慇懃

「鋭い眼光は山陽の面上を電のやうに射た。」
忠臣は 忠臣ハ必ず孝子之門ニ出ヅ。
(千字文の註)

二四 修學院の秋

大島 正 滿

大震災火災後の帝都復興の大計畫を立てるために、招聘されたベアード博士は、短い滞留期間に、家族に日本を學ばせるのも活きた教育になると考へ、博士は、夫人令嬢のほか、當時十五歳の令息を伴なつて來朝した。滞京一年あまりの間に、多趣味な博士は、能の研究もやれば歌舞伎をも見物する。いよいよ日本に別れを告ぐる頃には、博士もその家族も一かどの日本通になつてゐた。ところで、その令息は子供にも似合はず鋭い科學的頭腦の持主で、アメリカ魂とでも云ふのであらうか、物質の世界、科學の世界以外の事物には目もくれなかつた。

大島正滿 理學博士。
東京府立高等學校
教授。明治十七年
生。

修學院 修學院離宮。
京都市左京區修學
院町、比叡山西麓
にある。

「帝都復興の大計畫」
* 招聘
ベアード博士 コロ
ンビア大學教授。

「一かどの日本通」

ある時、筆者が博士や夫人令嬢と歡談を交へてゐた折のことであつた。話がはずんで演劇の問題に移つた。ところが、何を思ひ出したのか、側に談を聞いて居た令息は突然笑ひ出した。そして云ふには、

「日本の芝居に出て來る馬ほどをかきな動物はない。口をあけて上下の顎をばく／＼と噛合はせるではないか。馬といふ動物は、上下の顎を左右に動かして臼齒をすり合はせるものにきまつてゐる。それにあの脚は何だ。前は前後は後で、人間と同じ歩き方をするではないか。僕はあんな奇態な動物が出て來る劇は、をかしくて見てゐられない。」と。

「あれは人造の馬だから致し方がなからうぢやないか。」

「腹の皮がよぢれてとてもたまらないのに、あの馬が出て來

「演劇の問題」

* よぢれて

て、ちよんまげの男が何かものを云ふと、観客一同がそつと涙を流してゐる。非科學的な馬を見て涙をおとす日本人の心理も僕には解しかねる。」

なるほど、鹽原多助の「青」を観たのだなと、私は直感した。そこでその劇の筋を細々と説明し、馬の姿はとにかく、悲劇だからそれを観て泣けるのだと云ひ聞かせたところが、
「悲劇でも何でも、非合理的なものはをかしいのだ。あの馬を觀て笑はずに居られるか。」
アメリカン・ボーイは頑として應じなかつた。

「この子の眼には科學の世界以外何物も映らないのです。何とかしてまことの心の眼を開かせたいものです。」とベア

鹽原多助の「青」 歌舞伎狂言の「鹽原多助」中に、多助がその愛馬「青」に別れを惜しむ場面がある。それを指す。
*直感
*非合理

ード夫人はしみじみと語つて居たが、秋たけて高尾・梶尾が紅葉に燃ゆる頃、博士一行は相伴なうて京洛の地をおとづれた。そして洛北の風光をめづつ、修學院村に達した。

修學院の清掃された白砂の道を踏んで、紅葉色濃き丘の上に立つた時、古雅な茶亭を眺めつゝ、閑寂な境域を清らかに流るゝせゝらぎの音に耳をすましたアメリカン・ボーイは、驚異の眼を見はつてじつとたゞずんだ。

さら／＼と落ちる銀杏の葉の音に、夢からさめたのか、彼は突然「マザー！」と呼びかけた。

「世の中にこれほどうるはしい世界があつたのでせうか。電氣の世界、機械の世界以外に、神が人に賜はつたうるはしい世界がある。清楚な閑寂な美そのものとも云ふべきこの庭

高尾・梶尾 何れも京都市右京區梅ヶ畑にあり、清瀧川に沿ふ紅葉の名所。

*きしむ
*古雅

*清楚
「清楚な閑寂な美そのものとも云ふべきこの庭園」

園人間の手になつた至上至高のものを、僕は今さつたと思ひます。

と云つて慈母の顔を仰ぎ見た。母はにつこりと笑つて愛兒を抱きしめた。そして、

「日本に來た最大なたまものは、あなたの心眼が開けたことです。修學院の秋！ 何といふ美しさ！ 何といふ美しさ！」

と云つて、一葉のもみぢ葉をよろこびの記念とした。

（隨筆 不定芽）

「人間の手になつた
至上至高のもの」

「日本に來た最大な
たまものは、あなた
の心眼が開けた
ことです」

（隨筆 不定芽）

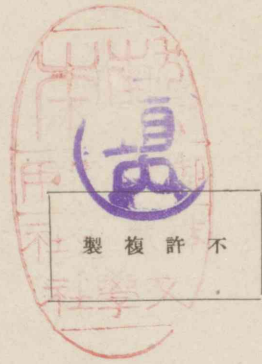
國語假名遣一覽

△國語には發音が相似てゐて、それを記す假名の同じでないものがある。之を書き別けるのを國語假名遣といふ。△本表は記憶に便するために、少數のものをあげて他を類推せしめる。

Table with columns for kana characters (え, 系, ひ, い, ゐ, お, ほ, を, へ, づ, す, ち, じ, は, わ, (ふ)) and rows of words and their meanings. Includes terms like 最モ少イのヲ暗記スル, 語頭デハハフイト發音スルコトハナ, 語中・語尾デハハフイトハ皆イデアアル, etc.

昭和十二年七月二十日 印
 昭和十二年七月二十三日 發
 昭和十三年一月二十二日 訂正再版 印 刷
 昭和十三年一月二十五日 訂正再版 發 行

女子國文新編(四年制)全八册奥附	自卷
	卷一
定價	各
	金五拾八錢



著者 垣 内 松 三
 發行者 株式會社 文 學 社
 印刷所 日東印刷株式會社
東京市神田區美土代町十八番地
 東京市本郷區眞砂町三十六番地

發 兌
 東京市神田區美土代町十八番地
 株式會社 文 學 社

關西一手販賣所
 大阪市西區靱北通り二丁目三五番
 株式會社 盛 文 館

